病者の文学

――正岡子規における病いと文学（Ⅲ）――

「仰臥漫録」考

黒沢勉

一、「仰臥漫録」の特色
二、概要
三、病苦の日録―散文と俳句
四、自殺への誘惑
五、庭前の景―糸瓜・鶏頭・朝顔など
六、食欲の問題
七、遺書

一、「仰臥漫録」の特色

子規に「仰臥漫録」（明治三十四年九月二日～十月二十九日を中心とする。二の「概要」参照）と題された現物で二冊の日記帳がある。講談社文庫では「子規三大随筆」の書名のもとに「墨汁一滴」「病床六尺」そしてこの「仰臥漫録」を収めているが、多少、問題のあるまとめ方である。脊椎カリエスによる病床にありながら、「日本」新聞に連載随筆を始めたのは「松蘿玉液」（明治二十九年）からであり、それに続く「墨汁一滴」（明治三十四年一月十五日～七月二日）そして死の三日前まで発表された「病床六尺」（明治三十五年五月五日～九月十七日）こそ、一括して三大随筆というべきものである。時期的に言えば「仰臥漫録」は「墨汁一滴」の連載を終えた後二ヶ月ほどしてから書かれたもので、「病床六尺」執筆の間にほぼ位置しているから「墨汁一滴」「仰臥漫録」「病床六尺」と一括しているのだろうが、その発想、動機、文体はずいぶん異なるものである。「仰臥漫録」が「墨汁一滴」や「病床六尺」と区別されなくてはならないのは次のような点からである。

第一にこれは随筆ではなく日記である。一般的にいって随筆と日記はきわめて近いジャンルだが、日記にははっきり日付が明記されており、個人の生活の記録としての色彩が強い。「仰臥漫録」はその点、日記であって、他の随筆と明らかに異なる。

第二に、子規はこれを公表するものとしてでなく、個人のごくごくプライベートな記録として書いているということである。日記は一般にそういう性格をもつものだろうが、文学者の場合、そこに創作的な意識も働き、読者の目を意識し、中には人に読ませるために書く場合もある。しかし「仰臥漫録」の特色は最初から「日本」新聞に公

表する予定として書かれた随筆と違ってここに一般の読者の目を気にしない裸の子規の姿があるという点にある。第三にその「裸の子規の姿」とは言語に絶するカリエスの痛み、苦しみが生み出した心と肉体の記録だということである。

今この病いにおける「裸の子規の姿」ということにこだわって考えてみたい。

子規は「仰臥漫録は少しも情をためず何も彼もしるしつつあるなり、ホトトギス紙上に公にするなどと言はれては今後は、筆渋りて書くことできず」と、これをホトトギスに載せようとした虚子を「叱責」したという。（ホトトギス第五巻、第一号明治三十四年十月）

しかし、日記の所在自体については弟子達はほとんどこれを知っていたらしい。弟子の一人であり、俳句の上では子規の衣鉢を受けついだ人と見られている高浜虚子は、このころの子規の生活をモデルにして「柿二つ」という小説を書いた。その中に次の一節がある。

「仰臥漫録は終始彼（＝子規）の枕頭にあったので訪者はよく手に取ってみた。この家賃くらべ（＝仰臥漫録には『家賃くらべ』と題して『虚子（九段上）十六円、瓢亭（番町）九円、碧梧桐（猿楽町）七円五十銭』などと弟子、知人の家賃を記したメモがある）は殊に人の眼をひいた。『これは面白い』と言って皆愉快そうに笑った。K（＝虚子自身である）は独り笑わなかった」

「仰臥漫録はほとんどKに対する彼の不平をもらすための記録ではないかと思うような心持さえした。けれどもそんな心持をして仰臥漫録に対するものはKばかりではなかった。彼の門下生は皆気味悪がりながらそれに対したのであった。そうして自分の事を言われたのでなくっても、そういう解釈のできる事に遭遇すると厭な顔をした」

枕頭に置かれたあった「仰臥漫録」を見ての虚子の感想である。「情をためず何もかもしる」すという子規の書き

方は虚子には恐ろしかったらしい。子規の名声はもはや天下にとどろいている。その子規の弟子をもって任じている自分の悪口を書かれたらどうしようという不安が虚子にはあった。また死のそこまで迫っている人間に批判でも書かれるとしたら、これも後味の悪いことであった。虚子がこれをホトトギスに載せたいといった背景には、あまりに露骨な批判を公表することによって抑えようという下心もあったのかもしれない。虚子の筆には子規を尊敬し慕うという以上に、師であり「兄」である子規を恐れる気持ち、また病者子規のエゴイズムをみる冷めた目が感じられる。

一体「情をためず何もかもしる」すということは何を記したかったのであろうか。虚子がいうように「Kに対す彼の不平をもらす」あるいは弟子達への批判を書くということであろうか。

確かに「仰臥漫録」を見れば「律は理窟づめの女なり、同感同情のなき木石の如き女なり」とか「律は強情なり、人間に向って冷淡なり」などという妹律に対する手厳しい批判があり、中江兆民に対する批判がある。兆民に対する批判は、偶像破壊者であり果敢な批評家であった子規の一面を物語るものとしても、肉親—しかも自分の一番世話になっている肉親への罵倒は理性的に考えるなら、ゆきすぎもはなはだしいことである。しかし罵倒は病苦からくる癇癪にすぎない。妹への憎悪と思われる記述の底には、本能にも近い肉親愛がある。それにしても、このような自らの評価を下げるとも思われるような生々しい記述というのは、私的な日記という形でなければ書けぬものではあろう。虚子の不安は律への批判を見て、その矛先が自分に向けられることを恐れたものと思われる。

しかし「情をためず」—感情を曲げる、偽る—というのは何も他者への批判ばかりではない。子規は、虚子が恐れたように他人へ「不平」を述べるために書いたわけでなく、自分の感情生活—喜びも悲しみも、腹を立てることもすべて含めて、正直、率直に書き記す、時に吐き出すために書いたのであって、そこに「仰臥漫録」の特色があ

る。

その根底にあるものとして、病いの苦しみを生き、死の近いことを痛切に意識している日常がある。「仰臥漫録」は、私的な日記ということで片付けられない病者の切実な生活の記録である。子規のように病苦に喘ぎつつ世を終えた人は多いだろう。しかしその苦しみをこれほど克明に正直、率直に記録したものは稀有である。「仰臥漫録」を読むものは、いながらにして子規の苦しみに立ちあうことができるのである。その苦しみは、死のさし迫った肉体と心の苦しみであった。

「仰臥漫録」には明らかに遺書と思われる部分も含まれている。河東碧梧桐の「子規の回想」の中には次のような記述がある。

「『天下の人あまり気長く悠長に構へ居り候はば』の『仰臥漫録』の書出しを、始めて読んだ時は平生とやかう文句を言われながら、ちょっとどきっとして、こりゃ面白いな、と気軽な口もきけなかった。遺言をお書きるのぢゃな、心の中でそう思って頭の中が熱で押しつけられるようだった。（中略）『仰臥漫録』が三十四年の八月二十六日に始まってから、そろそろ誕生も近くなるというので、比較的遺言の意味を明らかにしてまず『天下の人』と出てきたのぢゃないかと私は思うのだ。どっちかと言えばその後、そういう遺言めいた感想警句が層々雲となり風となりといったふうに天下の事から我々一個の上まで縦横に罵倒し憐殺（れんさつ）するであろう期待をもっていたのだ。それがおいおい、普通の日記化として再び風雲を生じそうもない。少々拍子抜けの体でもあった。

が子規の方では、もう何もできない、といって何もせずにおれない。仕方なしに日記でも書いてみよう気になって紙をとじさせたのだから、お前はなんでも仰山に物をお見るな、と笑いながら叱られた。三十四年一月から『日本』に『墨汁一滴』が出始めた。それは終わりには口述筆記となった。一時中止しても、もう何もできないのか、

あの重態ではと思っていると三十五年も夏近くなって『病床六尺』となって、あらたな不思議な元気を見せた。それは大半口述筆記で自ら筆をとった例はまれであった。この点、『仰臥漫録』はいかなる場合にも他人の筆を交えない、また交えしめない。子規自筆で終始している。いよいよ枯れて来るとでもいうか、その筆勢墨色に手を触れるだけで敬虔な荘厳味を感ずるようになった。別に何も書いていなくても、それが絶筆であるような、又遺言であるような—。

もう我々に向って言いたいことがなくなったのではないが、いつまで憎まれ口でもあるまいというのであろう。『仰臥漫録』では矛先がお律さんにのみ向けられている。随分読みづらい文句で蔭ながらお気の毒におもっていた。が、これこそ、そうとは言わぬ、自分亡き後のことを慮って特に露骨に強調した遺言であった。肉親を罵倒しているのではなかった。この憐むべき婦女子をと我々に向かって後事を依托しているのであった」

虚子が「仰臥漫録」に何か書かれるのではないかと不安に感じていたのに対して、碧梧桐はこの一文でわかるように、むしろ何か書いてくれることを—「縦横に罵倒して」くれることを期待していた。子規の罵倒癖は「松蘿玉液」や「歌詠みに与ふる書」にも表われていて反感を呼び起こしもしたが、その男性的な気概、信念に裏づけられた表現は子規の魅力でもあった。碧梧桐はそのような勇ましい、格調の高い文章を期待していた。また、遺書として劇的な、深刻な内容を期待していた。ところが、その期待通りの所もあったものの、再び平凡な日記的記述となって少しがっかりしたようである。

虚子、碧梧桐と並んで同じ子規門の俳人であり「日本」新聞の記者であった寒川鼠骨（さむかわそこつ）は、「仰臥漫録」を借り出し、しばらくの間それを返さずにいた。その行為は責められるべきだが一冊のかけがえのない本として「仰臥漫録」がどれ程鼠骨を慰め、励ましたかを、次の文章は如実に物語っている。

「仰臥漫録」の後に

蕪村の句に「灌佛は裸を示す初め哉」とあるが、人間は肉体の裸は示しても容易に内心の裸を示す者ではない。

「仰臥漫録」は子規庵を出て余が家に宿泊してゐる月日が長かった。さうして茲に世の中へ出る時も子規へ帰らずに余が家から出立したのであった。「墨汁一滴」や「病床六尺」なども皆な「仰臥漫録」と同時に居士が晩年の作であるから、其の虚飾のない告白であるという点に於て略ぼ同じ価値を持って居る。併し「墨汁一滴」なり「病床六尺」なりは未だ幾分の余所行き気分を含んで居る。少なくとも心安い親類へ行って泊ってゐるくらゐな遠慮を棄てずに居る。心置きがない乍らも未だ何処やらに自分の家に寝てゐるのとは異なった気分が残っている。それが「仰臥漫録」になると、世に示すの意思なしに書かれた為めでもあろう。全く自分の家に横になって打ち寛いで寝そべってゐるのである。其処には何の遠慮も心置きも認められぬ。子規居士の正体がありの儘に最も明白に最もむき出しに現出してゐる。斯んなに赤裸々に内心をかたってゐるものも稀である。

斯うして現れた有の儘の虚飾なき子規居士の正体に接すると、余は一層懐かしくて堪らないのである。病気で苦しい時とか、寂しくて堪らぬ時とか、不平で腹が立って堪らぬ時とか何時も此の子規居士の正体を引き出して来て面接をして見るのであった。そうすると、何時とはなしに病気も寂しさも不平も忘れてしまうのを常とした。其為めに余は「仰臥漫録」をば子規庵から借りて来ては返し、返して置いて借りて来たりし、近年は借りし吾家に留置く時間の方が長くなって居たのである。

併し何時迄も留置く可きでない。さりとて返してしまっては寂しくて堪らぬ。二三年前から何とかして複製でも得たいものぢゃと考へて居った。其願ひが今度恰も子規居士の十七回忌に当って岩波君の手によって達せられる事になったのである。嬉しくて堪らん。「墨汁一滴」でも「病床六尺」でも既に天下多数の人心を引きつけたので

あるから、「仰臥漫録」が余を引きつける事の力強いのは当然である。併し何故に斯様に魅力を持ってゐるのであるかは、余が説明をせずとも此書を見る人のそれぞれ分相応に領得せられる所だと思ふ。

紅葉山人にも其病気が不治と決まってからの日記が没後に発見されて、世に公にせられて居る。偽らざる紅葉山人が現れて居って不覚慄然（りつぜん）たらしめる所もあるが、併し山人は死といふ事を恐怖し人生を果敢（はか）なんで居るばかりで、それ以上の深い人生観を持って居らない事が明である。漱石居士も修善寺で重態に陥ってから稍々回復期になって東京へ運ばれ、病院に入院してゐた頃の記事がある。併し未だ娑婆気を失はずして色気満々たる所もあった。此の二人者に比すると子規居士の「仰臥漫録」は大体に於て遠く超越した人生観の上に成立って居る。病苦にも孤独にも不如意にも不平にも総ての上に安住して居る。あすをも知らぬ命であることを忘れて嬉々として子供のやうに遊んでゐる。そんなに大観し透徹して居り乍ら又何処迄も人間から離れずに真実の人情に生きて居る。人間味を持て人を脱離してゐる点が却って甚深（じんじん）微妙な響を発して余を魅し去らずんば止まないのである。居士が自ら仰臥の位置で走らせた肉筆の匂いが余を引きつけるばかりではないのである。

大正七年九月　　鼠骨　識

「仰臥漫録」の原本は、戦後に生き延びたことは知られているが、行方不明である。講談社は子規全集を刊行中にその原本の所在を紹介して頂きたいと呼びかけたが、持主からは何の応答もなかった。偏執的とも言える愛情のなせるわざといってもよいが、「仰臥漫録」がかけがえのない唯一の「書き物」だということを物語っている。

以上「仰臥漫録」の特色を述べ、弟子達にとってこれがどのような作品であるかを紹介してみた。「仰臥漫録」は一般読者の目を気にせず、ありのままの己れの姿をそこにさらし、記録し、楽しみながら書いた直接には己れ一

人の日記である。しかし、これは門人、弟子達に対しては開かれていたし、病床を訪れる人に自らこれを進んでみせ、それが話題になることもあった。プライベートといっても、全く秘密の読み手を期待しない日記ではなかった。

現代の私達は「仰臥漫録」をほとんど活字によって、公刊された本によってみているのだが、実は寒川鼠骨が手放せなかったように、その現物（その複製本）において味わうべき作品である。それは文芸上の作品というより病者の作りあげたかけがえのない「書き物」だからである。もし文学というものを、はじめから一般読者を予想して書かれ推敲して練り上げられた作品というなら、これは文学作品ではない。メモ的な記述や絵ハガキを貼りつけたり、墨絵や水彩画を交えたりして己れの楽しみとして書かれ、作られた私的な記録というべきものである。そこでは文学的な価値などというのが問題なのでなく、病者子規の生き方、その心こそ問題である。私はそのような視点に立ってこの稀有なる一冊について様々な視点から考察していきたい。それは一人、子規の病いの生を明らかにするのみならず、現代において病いの生をどう生きるか、ということについても示唆するところがあると思われる。

二、概要

岩波文庫の寒川鼠骨の解説（昭和二年）によれば、「仰臥漫録」執筆の動機として「土佐の俳人から贈ってきた土佐判紙が大判物で質のよいものであったから、ふとこうした手記を試みる気になられたものである」という。確かに「仰臥漫録」は布貼りのケースに収められた和紙の立派な冊子である。しかし、動機は作品の本質を示しているわけではない。この冊子に「仰臥漫録」と題をつけようとした時、子規の胸に去来したものは何だったろうか。「仰臥漫録」と四文字を記した時、子規の胸中には後になって訂正したりすることを要せぬ深い内的確信があり、

簡単に言ってしまえば「仰臥漫録」という言葉のうちに子規の信念が潜んでいると私は思う。それは「仰臥」のうちにありながら、「漫」の心を忘れない、いや忘れまいとする心である。

「仰臥」とはあおむけになって横たわることであるから、一般的に言えば、この言葉から病気を連想する必要はない。文字通りには「仰いて臥す」ことだから、それは、気ままに寝そべった姿でもかまわない。しかし、読み進むとわかるように、これは一日の大半をそのような姿勢を強いられて生きるしかなかった病床の子規の姿を示すものである。そこには自由を奪われたものの倦怠と、さもなくば激しい痛み・苦しみ・煩悶の日々がある。下手をすれば、そのように無意味とも思われる苦しみをしか生きられなかった生がある。一方「漫録」の「漫」とは「とりとめのない」という意味で「漫談」「漫遊」「漫筆」などの例にみられるように、まじめな、はっきりした意図、目的をもたない気ままな遊び、という意味である。「録」は「記録」の「録」で事実に基づいてそれを記録したものということだから「漫録」とは従って、気ままな遊びとしての記録である。記録することがそのまま遊びである。それは一見して無味乾燥な、たとえば食事の記録などを考えてみる場合も注意してみたいことである。また、秋海棠（しゅうかいどう）や朝顔の水彩画、あるいはまた朝鮮の草鞋（わらじ）などのスケッチとか、たわいもない家賃比べのメモ、その他雑然たる些事のメモなどの背後にある精神として忘れてはならないことである。たとえば九月十九日の記述に次のようなメモがある。「つくつくぼうしなほ啼く　追込の小鳥啼く　向かいの子供啼くどこやらの汽笛鳴る（午時の景）」これは「仰臥」している子規の耳もとに「午時（ひるどき）」聞こえてきた音を列挙した記録にすぎない。子規は感想も意見も想像も何一つつけ加えず、ただ事実だけをこうして列挙している。こうしたささやかな記録の背後に子規の好奇心があり、メモ的文体とも呼ぶべき文体創造の喜びもあった。たわいもない、ささやかな記録がこのように好奇心の対象であり、記録としての遊びである条件として「仰臥」を余儀なくされる日常があった。「仰臥漫録」はまさに「仰

臥漫録」であり、これ以外の名を考えることもできない作品名であった。

全二冊のその全体を概観しておくと次のようになる。

(1) 日記

これは「仰臥漫録」の基本を形作る部分で、ここから日記というジャンルに入れられることが多い。日記といっても、句日記、絵日記、病床日記であって普通の散文もあるがメモ的記述が中心となっている。その内容は食事のこと、食欲に関すること、病状のこと、庭前の植物のスケッチや俳句、来客のこと、人から贈られた品々などである。いまその日付を整理してみると次のようになる。

a、明治三十四年九月二日から十月二十九日迄の合計五十八日間。(複製本でみる「仰臥漫録」は「夕顔ノ実ヲフクベトハ昔カナ」の句をもって始まっている。一方「仰臥漫録二」は一頁目に文章の題材メモとも思われるものがあり、二頁目に「明治三十四年九月二日」の日付で夕顔・瓢・糸瓜のスケッチと説明、三頁目に女郎花・鶏頭の水彩画がある。内容的にはこの部分は冒頭にくるべきところで、何らかの理由があってスケッチや水彩画を描いたあとで別な冊子「仰臥漫録」の方に書き始めたものである。そして「仰臥漫録二」は十月十三日の途中から始まって十月二十九日まで日記が続いている)

b、明治三十五年三月十日から三月十二日までの三日間。(「仰臥漫録二」は前年の十月三十日以後中断し、再びaと同じスタイルで三日間だけ記されている。この年五月五日からは「病床六尺」の連載が始められる)

c、明治三十五年六月二十日から七月二十九日までの「麻痺剤服用日記」と題されたもの。(もちろんこれも「仰臥漫録二」に含まれるものでほとんどが麻痺剤—モルヒネを服用した時間、一日一回また二回のその時間だけを記したものである)

(2) 絵画・スケッチなど

a、以下のような絵画・スケッチが日記の中に含まれている。墨で描かれたスケッチ—糸瓜(へちま)、夕顔、瓢箪などの他に、蝶や蜂などの昆虫、蛙の鋳物や朝鮮の草鞋(わらじ)、ナイフと千枚通しなどで、これらのスケッチの大部分には俳句や説明の言葉が添えられている。

b、水彩画—菓子パンや朝顔、鉢植の草花を水彩絵の具で書いたもの。

c、切り抜きまたは貼りつけられたもの—パリの浅井忠から来た絵ハガキ、天津の佐藤肋骨から来た絵ハガキ、池内から贈られたカン詰めのラベルなどを貼りつけている。

(3) 俳句・短歌

日記としてその日その日に作った俳句が記されている他に、末尾には短歌や俳句がまとめて記されている。この中には人に送る歌や俳句の草稿も含まれている。

(4) メモ

一ヶ月の支払いメモ、一日のうちにみた動物のメモ、枕もとに聞こえて来た音のメモ、一ヶ月の支払いの内訳メモ、肋骨から送られた品のメモ、季語のメモ、「病床六尺」の題材メモと推定されているものなど雑然たる様々なメモが日記の中に含まれている。

(5) 遺書

「仰臥漫録二」の明治三十四年十月十五日の記事は、直接にはこれを読む門人達に宛てた一種の遺言であり、遺訓でもある。

「仰臥漫録」は以上のように雑然とした内容をもつ私的な性格の強い作品であるが、基本的には日付が記され、その日ごとに書かれた日記と言ってよい。そこでこの日記に至るまでの子規の日記を一通り眺めてみたい。

(1) 獺祭書屋日記

これは明治二十五年九月二十四日から明治二十六年九月二日までのほぼ一年間にわたる日記で、地の文は漢文で一行、それに俳句が添えられたもので、いわば漢文体と句による日記である。一例を示すと「九月二十六日」は次のようにある。

「登校。与漱石訪逍遙子於大久保（＝漱石と大久保に逍遙子を訪ふ）。夕月に萩ある門を叩きけり」

子規はこのころ文科大学の学生で、同級であった夏目漱石と坪内逍遙を訪ねたが、その時の記事である。「獺祭書屋日記」はこのような漱石始め新海非風、陸羯南、藤野古白らとの交友の記録である。子規は明治二十五年の七月に落第したものの、「俳魔に魅いられ」学校の勉強をほとんどしないで、日記としてもこのように俳句を作っていた。その結果自然に退学へと気持ちは傾き、明治二十五年十月には羯南に相談の上、退学し十一月には母と妹を故郷から迎え、十二月から「日本」新聞社の社員として入社する。日記には「登校」の二文字に代わって「出社」「到社」という言葉が多く見られるようになる。この日記は一年間にわたる句日記であり、学生生活を終えて「日本」新聞社員となるという子規の人生にとって大きな変化のあった年の記録である。事実の簡潔な記録と俳句による景情の表現という二つの流れは、「仰臥漫録」にも通じるものである。

(2) 病床日誌

この日記は明治二十八年五月二十七日から七月二十日まで子規を看病した虚子と碧梧桐が交替でつけた子規の看護日記であるが、「仰臥漫録」を考えるうえで興味深い点がある。

たとえば次のような記述。

「昼過くる頃迄談話。刺身一皿粥を喫す。夕方パンとヂャム及び玉子のフハフハを食ふ。けふは少し食ひよしといふ。夜安眠。この夕、発句数首を作る」（六月十四日）

「昼、例の如く快食。その後発句数句を拾ふ。夕飯前すなわち、六時前、体温三十八度二分に上り一時呼吸せはしく心臓の鼓動もはげしくして苦し気なる様なりき。しかし暫時にして鼓動はやみしも熱は下がらず」（六月二十三日）

「昨日よりオマルに跨げて大便し初めけるが大に都合よくて心もち甚だよしと。けふもかなり出たり。夕飯、快食大食なり。夜二度小便あり」（七月三日）

これらの記述は、子規自ら書いた「仰臥漫録」にきわめて近い。ともに病床の記録であり、病床における子規の食欲や生理、その日の過ごし方などが表現されている。子規の食欲は二人の後輩を驚かせていることなど興味深い。この日記が子規の目に触れた時、碧梧桐は「なんとか言はれせんかとビクビクしていた」。しかし子規はむしろ喜んで、読んで思わず吹き出したという。そして七月八日の日の虚子の記述に続いて子規自ら次のように記した。

「二三日来胃ヲ害シ為メニ不快ヲ感スルコト多シ。今夕稍快シ。食後始メテ病床日誌ヲ見ル。覚エズ笑壺ニ入ル患者自記」

子規の満足と喜びが伺われる記述である。自分の看護日誌をみて、思わず「笑壺」に入ったというが、このように後輩達の記した病床日誌も「仰臥漫録」を書かしめる一因となったであろう。「仰臥漫録」の中にはただ一度だけ、虚子が書いた部分がある。十月九日の記事で、おそらく子規の口述であろうが、末尾には「右九日分虚子記」と明記されている。これは「病床日誌」の「患者自記」として子規自ら書いたものと偶然ながら対応しているようで興味深い。子規は、かつて虚子達が「病床日記」を書いた時、一度自らもそれに書き記したことを思い出すこともあっ

たかもしれない。子規と虚子の関係の深さ—というより、子規の虚子に対する信頼、思いの深さを示す事実であろう。

(3) 病床手記

これは明治三十年八月二日から十一月二十一日の日記で上に見舞客や食事・薬・病状を記録、その下に俳句を記している。俳句の数はかなり多く一日に二十句を作っている時もあるところからみて、病床における句日記ともみなすべきものである。冒頭の一例を示すと次の通り。まず上欄に次のようにある。

「明治三十年八月二日。晴。病床にあり。午前山本木外先生訪はる。快談数時、共に午餐を喫す。台湾得る所なりとて墨及びこの帳面を恵まる。頃日用ふる所の薬餌。一、炭酸クレオソート二粒宛三度（食後）一、散薬（興奮剤）一日四包　一、水薬三度　一、ブランデー十グラム位宛三度（食時）一、朝　飯鶏卵半熟一個牛乳一合半位多くコーヒーを加へて飲む　一、午餐　隔日牛肉（淡路町中川のロース二十銭）牛肉ならぬ日は魚肉粥三碗位野菜一皿　一、晩餐　魚肉粥野菜　一、牛乳三合、その内半は朝飲み残りを二分して午後三時頃と八九時頃とに飲む（湯煎）一、牛乳スープ隔日（一斤十八銭位なるを湯煎にす）この外感触する事多し。医師は隔日位に来り、背の繃帯を更へ膿を絞る。近日体を動かす事多きを以て膿は自ら押し出され、ことさらに絞るとも出ぬ事多し。体温は朝六度位、夕七度四五分位なるを例とす。左足引きつけて立つ事能はず、十分に伸ばす事能はず。左の腰なほ痛む。仰い向けに臥し又は左を下にして寝ぬる時、痛みは咳嗽を発す。毎日浣腸す。律、右の足の腫物を切り未だ立つ事能はず。藤野従妹（琴）を頼み家事を手伝はしむ。医師柳某（宮本仲氏の代診）来る」（原文は漢字・片仮名表記）

以上が上欄に記され下欄には「書き干すや昔わが張りし不審紙」「土用干や本箱に虫のひそみたる」「わが物も昔になりぬ土用ほし」など合計二十七句が記されている。

「病床手記」はこの引用から分かるように山本木外から贈られた「墨」と「帳面」に記されたものであった。台

湾の珍しい「墨」と「帳面」を贈られたことがきっかけで、この手記を書いたわけであるが、それは丁度「仰臥漫録」が立派な和紙の冊子を贈られたことをきっかけとして書かれたのに似ている。大型の和紙の冊子であったことからスケッチや水彩画までそれに書き込んだということであって、私記のきっかけはともに贈られた品に発している点が興味深い。きっかけは本質を示すものではないとはいえ、きっかけがなければ又、何も始まらない、というのも事実である。そのきっかけとして、人からの贈り物、という点に子規を取りまく周辺の温かさも感じられるし、子規を生み出したものはそのような人々でもあったと思われてくる。

日記の内容として薬や細かな食事の内容、そして病状というのは、そのまま「仰臥漫録」に直結するもので、ここでは記録としてしか記されていないものが、「仰臥漫録」では食欲の表現、食への憧れとなって表現されているのは、これを一歩進めた奇形的な遊びともみられる。引用文では病状が生々しく記録的に記されているが、この日以降のものをみるとメモ的記述が多い。「仰向けに臥し」の一節は、次の「仰臥」漫録という題に自然につながっていく記述でもある。

「仰臥漫録」は以上のような日記のいわば集大成であり分量の面からまたその質の面からいっても、はるかに厚みを増している。その厚みは病者子規の病いの深さと共に、それをあくまで客観的に眺め日記として書き続けようとした遊び心—健康な精神に支えられて誕生したものである。

三、病苦の日録—散文と俳句

「病苦」という言葉がある。病気というより病苦という言葉の方が人間的な、また生活的な響きをもっている。

病気がこわいのはその苦しみゆえであり、病気はその苦しみとして表に表われる。その苦しみの中には肉体的な痛みも含まれるし、またそこから生じる様々な不安や恐怖といったものも含まれる。医学書は病気の原因や症状について客観的に書いているが、それは外から観察した科学としての病気であって、病気に苦しむ人の体験している、また体験した病苦ではない。病苦がどんなものであるかは病者しかわからない。この点から言って病者自身の記した病苦の記録は尊いものと言えよう。多くの記録があると思われるが、一般の人が読むことのできるものとして「仰臥漫録」は類まれな作品の一つである。その記述を通して、子規がどれ程苦しんだか私達はまざまざに知ることができる。書くことを業とする文学者の中には病苦のさ中にあっても書くことを手放さない人も多い。子規もそのような人であった。子規がその病苦にみちた生活を過ごした家は東京都上根岸の借家である。病気＝入院というのが現代の観念だが、当時は、自宅での療養が一般的であり、医師は訪問して治療にあたった。看病するのは家人であり、子規の場合、母の八重と妹の律であった。また、子規を慕う俳人や歌人、「日本」新聞社関係の人が看病することも多かった。薬は飲薬として、水薬・散薬（興奮剤）・クレオソート（肺の薬）の他に、繃散水、石炭散・脱脂綿・油紙・コナ薬（背中がただれた時用いる）を繃帯用として、またアルコールを体をふくために用いた（明治三十一年一月一日、大原恒徳宛書簡による）。明治三十四年の十月―つまり「仰臥漫録」を書いたころからは麻痺剤（モルヒネ）で痛みを和らげるしか方法のない日常であった。

子規の病気は脊椎カリエス（骨結核）である。その病状をみると、結核菌が脊椎に寄生し、その組織をくいあらす結果、膿が出来る。膿はその出口を求めて腰に穴をあける。痛みも激しく立ち上がることもできない。結核菌によって肺の組織も破壊され、痰に血が交じり、呼吸も苦しい。高熱に喘ぐかと思うと、体温が低下する。腹痛もはなはだしく、便通も苦しい。子規はこのような全身的な病苦をなめつくし、しばしば大声をあげて泣きわめいてい

る。こうした病苦の記述は「墨汁一滴」にも「病床六尺」にもみられるが、それは人に読ませることを意識しており、呼びかけであったり、文学的に形を整えたりしたものである。たとえば「墨汁一滴」の次の文章。

「をかしければ笑ふ。悲しければ泣く。しかし痛みの烈しい時にはしょうがないからうめくか、叫ぶか泣くか、又黙ってこらへているかする。その中で黙ってこらへているのが一番苦しい。盛んにうめき盛んに叫び、盛んに泣くと少しく痛みが減ずる」（明治三十四年四月十九日）

この文章を書かせたものは病気による痛みだが、その痛みを柔らげることについての発見である。その発見ゆえに、ただ痛みを訴える文とは違って何か一種のゆとりさえ感じられる。「盛んにうめき、盛んに叫び、盛んに泣く」などという表現には言葉遊びめいたユーモアさえ漂っている。また「病床六尺」の次のような一節。

「病床に寝て、あへて病気を辛しとも思はず、平気で寝ころんでおったが、このごろのように身動きが出来なくなっては精神の煩悶を起こして、ほとんど毎日気違いのような苦しみをする。この苦しみを受けまいと思ふて色々に工夫してあるいは動かぬ体をむりに動かしてみる。いよいよ煩悶する。頭がムシャムシャとなる。もはやたまらんのでこらへこらへた袋の緒は切れて、遂に破裂する。もうこうなると駄目である。絶叫。号泣、益々絶叫する。（中略）誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか。誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか」（明治三十五年六月二十日）

病苦の記述だが、あくまで読者を意識し、読者に説明し、最後には読者に訴えている。公表されたこれら二つの随筆に対し「仰臥漫録」はプライベートな記録である。記録する心の背景にあるのは病気という事実についての自らの関心である。病苦のさ中にあって自分の体や心がどうなるのかというのは、不安で恐ろしいばかりでなく気にするまいとしても気にせざるをえない関心の対象であった。（おそらく病者は一般的に、自分の病気、体について

普通の人以上にはるかに深い関心をもっている。痛みや苦しみは意識を呼び起こし、それが言語表現の形をとるとも言えよう）「仰臥漫録」は、人目を気にしない記録だから読者を意識した丁寧な表現、読者への語りかけなど必要でなかった。大半の叙述が漢字交じりの片仮名で記されているが、この片仮名という文字は非情な乾いた叙述、事実の記録にまことにふさわしい文字である。（本文は読みの便宜を考えて「仰臥漫録」の引用文は平仮名表記としておくが、遺書の部分を除けばその大部分は片仮名で書かれたものである）

「仰臥漫録」に子規の病状がどの程度、またどのように表現されているかを眺めてみると、明治三十四年九月二日から十月二十九日までの約二ヶ月、ほぼ連日のように病苦についての記述があり、しかもそれが一層つのっていることがわかる。一冊目は次項で述べる自殺への誘惑を記した十月十三日で終わっていて、二冊目の初めに一連の遺書が記されている。十月はのぼせがひどく、「精神激昂」「乱糾乱罵」などと記されている日が多い。明治三十五年の三月六日以降の記述をみると連日のように麻痺剤を呑んでおり、記述もずっと少なくなっている。

以下、「仰臥漫録」の中から病苦についての主な記述を抜き出して並べてみる。

①「今日、夕方大食のためにや例の左下腹痛くてたまらず、しばらくにして屁出で筋ゆるむ。（中略）午後八時腹の筋痛みてたまらず鎮痛剤を呑む。薬いまだ利かぬ内筋ややゆるむ（中略）十時半頃蚊帳を釣り寝（しん）につかんとす。呼吸も苦しく心臓鼓動強く眠られず、煩悶を極（きわ）む。心気やや静まる。頭脳苦しくなる。明方少し眠る」（九月二日。子規の記述の仕方は、その日の出来事をまとめて思い出して書くというやり方でなく、事の終わったあとに、一文か二文でそのことを記す、というものだったと思われる。食事についての記録なども、朝食べ終わると、その後に記すという書き方だったからこそ、あれ程細部にわたって記録できたのであろう。これは一度に長い文章を書くことができなかったためである）

②「歯齦の膿を押出すに昼夜絶えず出る。昨日も今日も同じ」（九月三日。カリエスによる膿は歯齦からも出て、脱脂綿でそれを拭き取るのが日課にもなっていた。その脱脂綿は池内氏から贈られたカン詰の紙の箱に入れていた。その外皮のラベルを「仰臥漫録」に貼りつけ「この紙の箱には今は方一寸位の脱脂綿の小片沢山入れあり。これは毎日歯齦の膿を押し出してはこの綿のきれで拭ひ取るなり」と記している）

③「夜に至って腹のはりたるためにや、苦しくてたまらず煩悶す。強ひて便通を試みたるに都合よくあり。いたく疲労、同時に発熱。験温器を入れて見るに三十七度七分しかないといふ。この熱なかなか苦し」（九月六日。便通についての記述がしばしば出ているが、母や妹に助けられての便通で、しかも、臀部に穴があいているし、力むと腹も痛むということで、これも一つの難事だった。便通を上手に終えるというのは、一安心ということであった）

④「朝両足を按摩せしむ」（九月九日。明治二十九年二月以降、ほとんど臥褥生活であり、床ずれで足も冷えきって、動かなくなっている。律にその足をもませることも毎日のことであったろう）

⑤「午前二時頃目さめ腹いたし。家人を呼び起こして便通あり。腹いよいよ烈しく苦痛堪へ難し。この間下痢水射三度ばかりあり。絶叫号泣。隣家の行山医を頼まんと行きしに旅行中の由、電話を借りて宮本医を呼ぶ。吐あり」（九月十四日。子規の主治医は宮本仲で陸羯南の紹介で二十六才の時から世話になっている。しかし遠いため近くの山本医師を頼んだが留守で、電話で宮本医師を呼んだ）

⑥「一両日来左下横腹（腸骨か）のところいつもより痛み強くなりし故ほーたい取替のとき、ちょっと見るに真黒になりて腐り居るやうなり。定めてまた穴のあくことならんと思はる。捨てはてたからだどうーならうとも構はぬことなれどもまた穴があくかと思へば余りいい心持はせず。このこと気にかかりながら午飯を食ひしに、飯もいつもの如くうまからず。食ひながら時々涙ぐむ」（十月二日。随筆ではユーモアと余裕を忘れない子規だったが、自

分の体をみて暗澹たる絶望的な思いを味わっていたことがわかる）

⑦「午後逆上ますますはげし。北側の四畳半の間に移る。額を冷し頭を扇ぎただ鼻血の出んことを恐る。目痛くて続いて新聞を見る能はず」（十月三日。気分転換のため部屋をかえ「逆上」の興奮の冷めた後、その事実をこうして記録した）

⑧「前日来痛かりし腸骨下の痛みいよいよ烈しく堪まらず、この日繃帯とりかへのとき号泣多時、いふ腐敗したる部分の皮がガーゼに付着したるなりと。背の下の穴も痛みあり。体をどちらへ向けても痛くてたまらず」（十月七日。繃帯取替は日課のように毎日三十分から一時間もかけて律が行った。その間子規は関心をそらそうと新聞に目をやったりしたが、あまりの痛みに泣いたり、怒鳴ったりすることもしばしばであった）

⑨「この夜頭脳不穏、頻りに泣いてやまず。三人に帰ってもらひ糞して眠り薬を呑んで眠る」（下痢やまず毎日三、四度便通あり）（十月十七日。精神的にもかなり参っていることが想像される。「墨汁一滴」や「病床六尺」には見られない子規の姿である）

⑩「夜に入りて癇癪起らんとす。病床の敷布団を取り代ふることによりて癇癪を欺きおはる」（十月二十一日。⑦にあるように部屋を変えたり、ここに記されているように布団を取り替えたりして気持ちの変化をはかろうとしている。何とかして爆発しがちな癇癪をなだめようとする一工夫である）

このような日々の記録ではなく説明として自らの容体と毎日の日課について一括してまとめた文章がある。明治三十四年十月二十六日の記事に「この頃の容体及び毎日の例」と題した述懐のような落ちついた次の記述。

「病気は表面にさしたる変動はないが、次第に体が衰へて行くことは争はれぬ。膿の出る口は次第にふえる。寝返りは次第にむつかしくなる。衰弱のため何もするのがいやでただぼんやりと寝ているやうなことが多い。

腸骨の側に新に膿の口が出来てその近辺が痛む。これが寝返りを困難にする大原因になって居る。（＝天井から紐をつるして、それにすがって寝返りをうつという状態だった）右へ向くも左へ向くも仰向になるもいづれにしてもこの痛所を刺激する。咳をしてもここにひびき泣いてもここにひびく。

繃帯は毎日一度取換へる。尻のさき最も痛くわずかに綿を以て拭ふすらなほ疼痛を感ずる。背部にも痛き箇所がある。それ故、繃帯取換は余にとっても律にとっても毎日の一大難事である。この際に便通ある例で、都合四十分ないし一時間を要する。

肛門の開閉が尻の痛所を刺激するのと腸の運動が左腸骨の痛所を刺激するので便通が催された時、これを猶予するの力もなければ奥の方にある屎をりきみ出す力もない。ただその出るに任するのであるから日に幾度あるかも知れぬ。従って家人は暫時も家を離れることが出来ぬのは実に気の毒の次第だ。

睡眠はこの頃よく出来る。しかし体の痛むため夜中、幾度となく目をさましてはまた眠るわけだ。

歯齦から出る膿は右の方も左の方も少しも衰えぬ。毎日幾度となく綿で拭ひ取るのであるが体の弱って居る日は十分に拭ひ取らずに捨てて置くこともある。

物を見て時々目がちかちかするやうに痛むのは年来のことであるが先日逆上以来いよいよつよくなって新聞などを見ると直に痛んで来て目をあけて居られぬやうになった。それで黒眼鏡をかけて新聞を読んで居る。

朝々湯婆を入れる。熱出ぬ。小便には黄色の交り物あること多し。

食事は相変らず唯一の楽であるが、もう思ふやうに食はれぬ。食ふとすぐ腸胃が変な運動を起こして少しは病む。食ふた者は少しも消化せずに肛門へ出る。

さしみは醤油をべたとつけてそれを飯または粥の上にかぶせて食ふ。佃煮も飯または粥の上に少しづつ置いて食

ふ。歯は右の方にて噛む。左の方は痛くて噛めぬ。

朝起きてすぐ新聞を見ることはやめた。目をいたはるのぢゃ。人の来ぬ時は新聞を見るのが唯一のひまつぶしぢゃ。

食前に必ず葡萄酒（渋いの）一杯飲む。クレオソートは毎日二号カプセルにして六粒」

以上、散文を通して病苦の状態、その表現をみてきたが、次に、これが俳句でどう表現されているのか眺めてみよう。

①「人問はばまだ生きている秋の風」（九月八日）

（もし人に元気かと尋ねられたなら、秋風の吹く今となってもこうして生きていることだ、と答えよう）

②「牡丹にも死なず瓜にも糸瓜にも」（同）

（牡丹の咲くころも生きていた。そして瓜・糸瓜が実る今もこうして生き延び、生きていることだ）

③「病床のうめきに和して秋の蟬」（同）

（病床で苦しみうめき絶叫する自分の声に和するかのように秋の蟬がしきりに鳴いている）

④「痩臑（やせずね）に秋の蚊とまる憎きかな」（九月九日）

（骨と皮ばかりに痩せ衰えた臑に、秋の蚊がしつこく止まっていて逃げようともしない。腹の立つことだ）

⑤「病人の息たえだえに秋の蚊帳」（九月二十一日）

（蚊帳（かや）のスケッチの中に書きこまれた句の一つ。蚊帳の中に息たえだえの病人がいて、一人苦しみ喘いでいることだ）

⑥「糸瓜さへ仏になるぞ後（おく）るるな」（九月二十一日）

（次の句と共に「草木国土悉皆成仏」と題されている。草や木を初めとしてすべてのものが成仏するというが、ならば眼前にぶら下がるこの糸瓜も仏になろう。自分もこの糸瓜に後れぬよう成仏を急ぎたいものだ）

⑦「成仏や夕顔の顔へちまの屁」

（夕顔のその「顔」、へちまのその「屁」も心なしか成仏した名残をとどめているようにも見える、の意か。夕顔の顔というのは、実際にぶら下がっている夕顔をいったものだろうが、そこから次の「へちまの屁」と言葉遊びに転じたものであろう）

⑧「痩骨をさする朝寒夜寒かな」（十月一日）

（「病床」と題されている。朝の寒さ、夜の寒さの感じられるころ、こうして病床に一人自らの痩骨をさすっていると、いっそう寒さも身の衰えも感じられることだ）

⑨「首あげて折々見るや庭の萩」（末尾に一括して並べられている句の一つ）

（「臥病十年」と題されている。カリエスのためこうして病床に臥す身となって十年になろうとしている。その間首をあげて折々庭の萩を見ることを一つの楽しみとして生き続けてきたことだ）

⑩「蝸牛の頭もたげしにも似たり」（同）

（「小照自題」と題されている。自分の姿を鏡に照らし出すように見てみれば、蝸牛が頭をもたげた様にそっくりではないか。横たわったまま片腕をついて上半身をあげることしかできない自らの姿を蝸牛に喩えて詠んだもの）

⑪「活きた目をつつきに来るか蠅の声」（同）

（「病中作」と題されている。病床に臥したきりの自分をまるで死んだものと思ってでもいるように、遠慮なく目をつつきに来る蠅の声がする。「声」の脇に「飛ぶ」と記され、どちらにするか迷った形跡をとどめている）

①②⑥⑦などはいずれも死を意識したもので、つのる病苦ゆえに、死の近いことをまざまざと意識しながら生きていることが伺われる。しかし、それはまじめに深刻にあるいは深い悲しみをもって詠まれているのではなく、まるで他人事のように客観的に、ユーモア、冗談をこめた詠みぶりであり、散文の深刻な、重い記述に対して一種の軽みさえ伺われる。俳諧とはもともとユーモアという意味であるが、子規の俳句修業によって身につけた精神が、ここにおいても生き続けていることが感じられよう。

「仰臥漫録」には収められていないが、子規の辞世の句とされる有名な句がある。これは明治三十五年九月十八日即ち死の前日、妹に画版を持ってもらいながら、その画版に碧梧桐の見守る中で記したものである。この時、画版は「仰臥漫録」であったと言うこともできるだろう。以下その絶句の三句をあげておく。

「糸瓜(へちま)咲て痰のつまりし仏かな」

(糸瓜の花が美しく咲いた。しかし自分は血痰がつまり、もはや死んでしまった仏にも等しい存在だ)

「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」

(李白は一斗の酒を飲んで百篇の詩を作ったというが、自分は痰を一斗も吐き、咳を静める糸瓜の水も間にあわず死にそうである)

「おととひのへちまの水も取らざりき」

(おととい用意していた咳を慎めるという糸瓜の水をとる間もなく、すぐにも死にそうな自分である)

四、自殺への誘惑

逃れられない病苦の中にあって、死の観念が頭をよぎらない人はないであろう。想像力をもった動物である人間は、ただ今、現在の痛み、苦しみを受けとめるばかりでなく、その苦しみの果てにある死というものを、まざまざと意識し、不安を覚え、深い無力感、あきらめに襲われ、絶望的な気持ちのままに生きる人も多い。しかしこれまでみてきたように子規は病気という負の条件の中にあって、かえって闘志を燃やした人である。二十二才の結核発病、二十八才で脊椎カリエスと二つの宣告を前にして、むしろ子規は生への自覚を深め、文学に己れを賭けようとする決意を一層燃え上がらせた。「死は近づきぬ、文学はいよいよ佳境に入らんとす」（明治二十八年十二月、五百木瓢亭宛書簡）という言葉は、病いや死というものを逆手にとって文学的精進を積み重ねようという子規一流の負け惜しみの闘志を示す言葉である。

しかし、子規とて、執拗なまでにわが身を責め、さいなむ病苦の中にあって、それから逃れる一つの手段として自殺への誘惑に駆られることもあった。動物と違って自殺ということの可能な人間にあって、苦しみから逃れるため自殺を思う、ということは自然な空想でもある。しかし、その空想を現実に移すかどうか—自殺するかどうかということについてはその人間の個性や置かれた状況などによって様々な違いが出てくるであろう。自殺の統計資料をみれば現在でもその原因として「病苦等」が理由のトップを占めている。（別表参照）「病気」ではなく「病苦等」という表現のうちに自然科学としての「病気」の問題ではなく、人間にとって苦しみの問題が潜んでいる。

その苦しみを担いもしないで結論を言うのは、あまりにあさはかなことを承知の上で言えば、人は病苦ゆえに—

性・年齢階級・動機別自殺数と構成割合（%）

平成５年（'93）

	自殺死亡者数	構成割合（%）								
		家庭問題	病苦等[1]	生活・経済問題	勤務問題	男女問題	学校問題	アルコール症・精神障害	その他	不詳
総数[2]	21,851	9.0	41.9	11.4	4.8	2.6	0.9	17.6	5.5	6.3
男[3]	14,468	7.9	37.4	15.7	6.7	2.6	1.1	14.9	5.9	7.8
0～9歳	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
10～14	36	16.7	2.8	－	－	－	50.0	－	8.3	22.2
15～19	265	8.7	11.7	1.9	4.2	7.9	25.7	19.2	12.5	8.3
20～24	829	5.3	14.2	8.6	12.5	11.5	7.1	21.5	8.7	10.6
25～29	780	7.3	19.4	11.5	14.2	8.6	0.9	25.5	5.4	7.2
30～39	1,805	9.0	20.9	17.3	9.0	4.6	0.1	24.9	5.9	8.2
40～49	3,068	8.6	27.0	22.8	9.7	2.2	0.0	18.0	5.1	6.6
50～59	3,472	7.1	38.7	22.0	6.6	0.7	－	11.5	5.0	8.4
60～64	1,306	7.5	50.2	15.8	2.4	0.6	－	10.9	6.2	6.4
65～	2,765	9.0	69.0	4.3	0.6	0.3	－	6.8	6.5	3.3
女[4]	7,383	11.0	50.8	2.9	1.1	2.5	0.6	22.8	4.9	3.4
0～9歳	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
10～14	22	31.8	－	－	－	4.5	31.8	18.2	9.1	4.5
15～19	123	8.9	14.6	0.8	1.6	15.4	16.3	27.6	7.3	7.3
20～24	311	8.7	17.7	2.6	7.4	13.2	5.5	33.1	4.8	7.1
25～29	331	11.8	23.3	2.4	3.6	11.8	－	37.8	5.1	4.2
30～39	668	13.8	24.4	3.7	1.8	5.7	0.1	40.4	4.5	5.5
40～49	1,078	13.8	36.4	5.7	1.3	3.5	－	32.9	3.1	3.3
50～59	1,374	10.8	50.2	4.4	0.9	0.7	－	26.9	3.4	2.6
60～64	609	8.0	56.8	3.8	0.5	－	－	24.3	4.4	2.1
65～	2,845	10.0	70.5	1.1	0.0	0.1	－	9.7	6.4	2.1

注　1）病苦等とは，病気，身体障害苦，老衰苦，身体的劣等感，その他の病苦をいう。
　　2）年齢不詳164が含まれている。　3）年齢不詳142が含まれている。　4）年齢不詳22が含まれている。
資料　警察庁保安部防犯企画課「平成５年中における自殺の概要」（平成６年４月）

1994年「国民衛生の動向」より

そしていかなる苦しみゆえにも自殺すべきでない。自殺への誘惑に襲われても、そのみじめさや苦しみに耐えぬいて死ぬまでは生きるべきだと思う。だが、どのようにして苦しみの生を生きぬくか、それは絶望的とも言える苦しみを生きる者にとって難しい問題に違いない。自殺が逃避と言われようと一種の勇気であり、断念であるのに対し、苦しみと共に生きぬくには地味なねばり強い忍耐が必要である。

文学者で自殺した人は多い。そして、自殺したことで文学者としての評価が低くなるというわけではない。作品に対する評価と作家の生き方に対する評価はまた別だからである。しかし、子規に限って言えば、病苦をなめつくして、なおかつ自殺しなかったその生き方に偉大さの一つがある。いや、自殺せぬどころではない、病苦に耐えて、生きがいを求め、文学的精進を積み重ねたこと、最後の最後まで文学者としての生を貫徹した点に子規の偉大さがあり、それがそのまま作品の魅力となっている。子規を自殺した文学者と比べてみればその敢闘精神、健全な意志は輝いてみえる。

「墨汁一滴」の「今日は闕（けつ）、但し草稿二十二字余が手もとにあ

り」（五月十三日）という記事はもともと「試みにわが枕元に毒薬を置け、しかしてこれを飲むか飲まんか見よ」という文章であった。しかし、これは人目をはばかって公表することなく伏せたものである。自殺を予告、暗示するような文章を新聞に載せるわけにはいかなったからである。「仰臥漫録」はその点公表するために書いたものでないだけに正直、率直に、何でも書くことができた。自殺した人の残した文章―遺書―はある。しかし自殺への思いを語ってその一歩手前でとどまり、その時の心の動きを記した文章は稀有であろう。自殺への誘惑にかられた日の出来事、その心理を子規はまるで一つのドラマのように記している。

「十月十三日　大雨恐ろしく降る。午後晴れ」という書出しが、すでに暗示的である。自殺に駆られた時の心境を子規は、こうして日記の中に封じ込めた。死すらも日記の中の出来事であって、日録を越えて、はみ出す形で死があるのではない。記録への情熱は己の死すら客観的に眺めようとする。ことの終わった後―興奮さめたあと、内心のドラマをその日の出来事として次のように記した。

「今日も飯はうまくない。昼飯も過ぎて午後二時頃天気は少し直りかける。律は風呂へ行くとて出てしまうた。母は黙って枕元に坐って居られる。余は俄（にわか）に精神が変になって来た。『さあたまらん、たまらん』『どーしやう、どーしやう』と苦しがって少し煩悶を始める。いよいよ例の如くなるか知らんと思ふと、益々乱れ心地になりかけたから『たまらん、たまらん、どうしやう、どうしやう』と連呼すると母は『しかたがない』と静かな言葉、どうしてもたまらんので、電話をかけうと思ふて見ても電話かける処なし。遂に四方太（ほうだ）（＝坂本四方太。俳人で、子規の弟子）にあてて電信を出す事とした。母は次の間から頼信紙を持って来られ、硯箱もよせられた　直に『キテクレネギシ』と書いて渡すと母はそれを畳んでおいて羽織を着られた。『風呂に行くのを見合せたらよかった』といひながら銭を出して来て『車屋（＝人力車を置いている車屋）に頼んでこう』といはれたから『なに同し事だ。向へま

で往っておいでなさい。五十歩百歩だ』といふた心の中はわれながら少し恐ろしかった。『それでも車屋の方が近いから早いだろう』といはれたから『それでも車屋ぢゃ分らんと困るから』と半ば無意識にいふた余の言葉を聞き棄てにして出て行かれた。さあ静かになった。この家には余一人となったのである。余は左向に寝たまま前の硯箱を見ると四、五本の禿筆(ちびふで)、一本の験温器の外に二寸ばかりの鈍い小刀と二寸ばかりの千枚通しの錐とはしかも筆(=「はしはみ筆」で、紙に折りたたんで箸のように包まれている筆のことか)の上にあらはれて居る。さなくとも時々起らうとする自殺熱はむらむらと起こって来た。実は電信文を書くときにはやちらとしてゐたのだ。しかしこの鈍刀や錐ではまさかに死ねぬ。次の間へ行けば剃刀があることは分って居る。その剃刀さへあれば咽喉を掻く位はわけはないが悲しいことには今は匍匐(はらば)ふことも出来ぬ。已むなくんばこの小刀でものど笛を切断出来ぬことはあるまい。錐でも心臓に穴をあけても死ぬるに違ひないが長く苦しんでは困るから穴を三つか四つあけたら直ぐに死ぬるであらうかと色々に考へて見るが実は恐ろしさが勝つのでそれと決心することも出来ぬ。死は恐ろしくはないのであるが苦が恐ろしいのだ。病苦でさへ堪えきれぬこの上死にそこなふてはと思ふのが恐ろしい。そればかりでない。やはり刃物を見ると底の方から恐ろしさが沸いて出るやうな心持もする。今日もこの小刀を見たときにむらむらとして恐ろしくなったからじっと見てゐるとともかくもこの小刀を手に持って見ようとまで思ふた。よっぽと手で取らうとしたがいやいやここだと思ふてじっとこらえた心の中は取らうと取るまいとの二つが戦って居る。考へて居る内にしやくりあげて泣き出した。その内母は帰って来られた。大変早かったのは車屋まで往かれたきりなのであらう」

その日の出来事、心理を記したものだから過去形で表現すべきところである。しかし現在形を中心とした記述は、あたかも、これを今眼前の出来事のように感じさせる生々しさがある。子規は書きながら、己れの心理を分析し創

作のように生き生きとこれを記している。

「今日も飯はうまくない」という冒頭の一文は、生きている楽しみを奪われ、苦しい生活を強いられているということを端的に、即物的に表現したものである。しかもその上「精神が変に」なって「煩悶」「乱れ心地」になってきた。律は風呂へ行っていないので、母に訴える。しかし、母は「しかたがない」と落ちつき払ったもの。確かにどうにもならないこととはいえ、母の言葉には武士の娘らしい芯の強さが感じられる。このような時、身内の者も動転して一緒に泣いたりしがちなものであろうが、母の態度は心憎い位落ちついている。少なくとも、あわてふためく子規にとってはそう感じられた。現代であれば医師を呼ぶところだが、子規はこのような時、弟子に来てもらって看病を受けることが多かった。「仰臥漫録」の中で医師に来てもらったという記述があるのはわずか一度だけである。隣家は子規の籍を置いている「日本」新聞社の社長陸羯南（くがかつなん）の家で、その羯南に来てもらうこともあった。十月五日、「乱糾乱罵」のあげく、「遂に陸翁に来てもらひ　精神やや静まる。陸翁つとめて余を慰めかつ話す。余もつとめて話す」という記事がある。この日は、近くに住む俳句の弟子である坂本四方太に来てもらった。その電文は「キテクレネギシ」の七文字である。子規はこのような形で、師としての、また病人としての特権を発揮し、人々に甘えた。母が電信文を持って出かけた。一人になったその時、死—自殺を思った。子規はそれを「自殺熱」と表現した。熱病のように内から湧き出してやまない想像である。自殺への思いは、苦しみから逃れたいというところから生まれる自然な感情である。この日も「精神の煩悶」が引き金となって、自殺の思いがすでによぎっていた。母に対して「四方太のところまで迎えに行きなさい」と言った子規の心の中には一人になりたい、という思いがすでにあった。その望み通り母も妹もいない、たった一人になった。「さあ、静かになった」と子規はそれを記す。それを心待ちにしていたかのように、心昂らせて。一人になった子規の目に小刀と千枚通しが映った。それは日頃

空想しがちであった死への思いを具体的な形で引き起こす。その空想は子規らしくいかにも具体的、トリビアルである。「長く苦しんでは困るから穴を三つか四つあけたら直に死ぬるであろうか」などと考えている。死ぬ前に「長く苦しんでは困るから」などというのもいかにも子規らしい書きぶりだし「三つか四つ」といっても、果たしてそんなに突けるものかどうか—細部にわたるこんな想像は逆に死への恐れを呼び起こす。しかし、これは実際に死のうと思った時の心というより、これを書いている今現在の心理でもあろう。これを書きながら、子規は死を恐れているのである。しかし、生きていることはあまりに苦しい。こうして苦しみのあまり、死の安らぎを求めつつ、一方では死ぬまでの苦しみに恐怖して決断できないこの矛盾が葛藤を引き起こす。子規は矛盾の解決を求めて書いたのかもしれない。しかし書くことによってその矛盾、葛藤は深まるばかりだった。逃れ道のないディレンマは理性を破壊しかねないものであったろう。自殺への誘惑にかられたこの日の出来事を記し、自らの心理を解剖してみせたあと、これに続け呼吸をあらたに書き加える。

「逆上するから目があけられぬ。目があけられぬから新聞が読めぬ。新聞が読めぬからただ考へる。ただ考へるから死の近きを知る。死の近きを知るからそれまでに楽みをして見たくなる。楽みをして見たくなるから突飛な御馳走も食ふて見たくなる。突飛な御馳走も食ふて見たくなるから雑用（＝雑費、お金）がほしくなる。雑用がほしくなるから書物でも売らうかといふことになる…いやいや書物は売りたくない。さうなると困る。困るといよいよ逆上する」

これは短文を尻取り式に積み重ねた遊びである。これを記しながらおそらく子規の心は弾みがつき、躍っていた。表現することだけが唯一の救いであるように。逃れられない袋小路。死の近きを知るゆえに現世の快楽を求め生きようと努めてみても、そのための金があるわけでもない。考えてもどうにもならず「逆上」しながら生きるしかな

い。世の中に苦しみや悩みを訴える文章は数多い。しかし、こんなふうに苦しみ自体も言葉の遊びとしてしまう点に子規のしたたかな精神がある。弾みのついた遊び心は、文章にするだけではおさまらなかった。子規は、死の想像に自ら駆り立てた千枚通しと小刀のスケッチさえ描く。そしてその上に「古白曰来」の四文字を記した。「古白」とは藤野古白という子規の親類にあたる人物であり、明治二十八年四月七日にピストル自殺している。「古白曰来」とは、自殺した古白が自分を招いているということであり、「自殺熱」にかられたことを、別の視点から捉え直して、あたかも見出しのように置いたものである。おそらく、さき程までの文章のあと、一呼吸おいて書き加えたものであろう。

「仰臥漫録」はこの四文字とスケッチで終わっているが、子規は明らかにこの一冊の日記の締め括りとしてこの四文字を記したのではなかろうか。「仰臥漫録」がこの四文字とスケッチで終わっていることに子規一流の遊び心、趣向を私は感じる。そしてそれは単なる遊び、趣向とも言えぬ、病者子規の深層の心理を表わしてもいると思われる。即ち「仰臥漫録」と表で強がって記した題の裏にあるのは、死への深い誘惑に襲われつつも死を選ぶことのできない人間の戯れの記録であることを、あたかも秘められた題のように提示しているともみえてくるのである。

「古白曰来」の四文字を記し、しばらくその興奮を余韻のように子規は味わったあとであろう。「仰臥漫録二」は落ちついた、改まった気分で「再びしゃくり上て泣候処へ四方太参りほととぎすの話金の話などいろいろ不平をもらし候ところ夜に入りて心地はればれと致申候」と記した。これで十月十三日の記述は終わっている。息づまるような苦しみ、切羽詰まった混乱の状態—それは同じ調子でいつ迄も続くわけではない。興奮のさめた後の落ちつきが、これまで使われることのなかった「候」とか「申す」という敬体の丁寧な表現をとらせたのかもしれない。そしてこの十月十三日のあと、十月十五日には一連の遺書が続く。「自殺熱」の記述から遺書へ—そこには心理的

必然がある。後述するように、自殺への誘惑に襲われた子規の意識はもはや死の世界に赴き、そこから現世を見ているとも言える。

五、庭前の景—糸瓜・鶏頭・朝顔など

「仰臥漫録」の大切な素材となっているものに、糸瓜や鶏頭・朝顔などの植物がある。これは、子規庵に花を咲かせ、また実をつけたものを、スケッチしたり俳句に詠んだりしたものである。すでに明治二十九年、脊椎カリエスによる臥病生活の中で書き始めた「松蘿玉液」において、庭前の草花は子規の主要な関心の対象となり、それを散文や俳句によって表現していた。自由に外出し、多くの人と出会い、自然に触れることのできない子規は、このように身の周りの草花に心を寄せ、それを心ゆくまで味わうことを通して心を慰めた。「病む我を慰め顔に開きたる牡丹の花を見れば悲しも」という短歌は、これらの植物が子規にとってどんな意味をもっているのかを示している。健康な時には忘れがちなこれらの素材があらたな意味をもち始めた。俳句を通してすでに自然を見ることを学んでいた子規は、病いによって一層、その目を深めていったとも言えよう。「かめにさす藤の花房短ければ畳の上に届かざりけり」という歌には、クローズアップしてみたものの発見が息づいているが、クローズアップによるささやかなもの、トリビアルなものの発見が子規の精神の健康を支えている。ここにあげた二首の歌はいずれも「墨汁一滴」に収められているものだが、「仰臥漫録」では俳句がスケッチと一体になった形で表現されている。

病者にとって、身近な一木一草も、時として深い意味をもつものとなる。これは、子規に限らず一般的に言えることであろう。多忙な日常生活、ある意味では修羅場の世界に生き、たえざる愛憎や利己心に動かされがちな私達

は病いの中にあって初めて深い休息、安らぎを得る。その時、今まで忘れていた一木一草が語りかけ、互いに命あるものとして共感さえ抱くようになる。それは病いのもたらす、プラスの面である。しかし、現代の、たとえば集中治療管理室における病者に象徴されるような、外界から遮断されたコンクリートの密室における病者は、病いのもつ深い意義—魂の回復といった面からみた時、再検討されなくてはならない面をもっているとも言えよう。現代における病者の生をあらためて問い直し、病者が病者として充実した生を生きるヒントが「仰臥漫録」の中にはある。

「仰臥漫録」の中で身近な草花の姿がどう表現されているかを具体的に眺めてみよう。

まず作品の冒頭で「明治三十四年九月二日、雨蒸暑」という日付け、その日の天候に続き、さっそく「庭前の景は棚に取付てぶら下がりたるもの。夕顔二、三本　瓢（ふくべ）（＝ひょうたん）二、三本　糸瓜四、五本夕顔とも瓢とも つかぬ巾着型の者四つ五つ」と記されている。そしてその隣に上から順に夕顔・瓢・糸瓜・巾着形のものが一つずつ、一筆書きのような荒い、素朴なタッチで描かれている。庭の棚にぶら下がっている相似たものを、その形の違いに興味を感じて描いたものであろう。次に「女郎花（おみなえし）真盛（まっさかり）、鶏頭（けいとう）尺より尺四、五寸のもの二十本許（ばかり）」とあり、上に女郎花、下に鶏頭が墨の濃淡を生かして写生されている。

病床に臥す者とはいえ、季節は秋である。実をつけるものは実をつけ、花咲くものは黄色や赤などそのとりどりの色で花咲かせる。臥褥の身となったのが明治二十九年二月のことであるから、丸五年以上の月日が流れている。限られた病床六尺の世界に生きる者にも、自然の営みは興味深く感じられる。病床のつれづれのままに子規はそれを写生した。日録は写生帳でもある。明治三十二年五月、中村不折からもらった絵具で初めて水彩画を書いて以来、水彩画を描くようになっていた子規だが、もともと絵心もあって十七才の時から書き始められた「筆まかせ」をみ

ると友人への書簡に自らのスケッチを添えたものもある。絵心は子規の生まれつきの関心としてあったものであろう。「仰臥漫録」をみると対象を忠実に観察し写生しようとしている子規の姿が想像される。散文はスケッチしたものを説明するための最低限の記述で、俳句へと向かっている。また、物の形そのものへの関心に促されて記したものもある。スケッチしている子規は、その間、病苦を一時忘れ、己れを忘れて無心に対象に見入っている。

冒頭の夕顔・瓢・糸瓜のスケッチに続いてあわせて十九の俳句が並んでいる。それを列挙してみよう。

①「夕顔の実をふくべとは昔かな」

（夕顔の実を昔はふくべとも呼んでいたことだ。この句にいうように、夕顔という名は、花が夕方開くことからつけられたもので、実はひょうたんと区別して「ながふくべ」とも呼ばれていた）

②「夕顔も糸瓜も同じ棚子同士」

（夕顔も糸瓜も同じ棚にぶら下がって垂れている同士、兄弟のようなものだ）

③「夕顔の棚に糸瓜も下りけり」

（夕顔のぶら下がっている棚に糸瓜も兄弟のように垂れていることだ）

④「鄙の宿夕顔汁を食はされし」

（この句には「右八月二十六日俳談会席上作」と記されて五、六日前の俳談会の時に作ったことがわかる。棚の夕顔をみるとかつて旅をした時、田舎の旅館で夕顔汁（しる）が食事に出てきたことが思い出されるよ）

⑤「夕顔の太り過ぎたり秋の風」

（太り過ぎる位、大きくなった夕顔が重そうに下がっている。そこを秋風がさわやかに渡っていく）

⑥「棚一つ夕顔ふくべへちまなんど」

（一つ棚に夕顔や瓢、糸瓜などが所狭しといかにも重そうにぶら下がっている）

⑦「棚の糸瓜思ふ処へぶら下がる」

（幾つもの糸瓜がそれぞれ思い思いの所へぶら下がっている―いかにも楽しげだ）

⑧「試みに名をば巾着（きんちゃく）ふくべかな」

（「夕顔とも瓢ともつかぬ巾着形の者四ツ五ツ」というスケッチに添えた説明を今度は句としたもの。この巾着型の瓢箪をためしに、「巾着ふくべ」とでも名づけようか。あだ名のように名づけを楽しんでいる童心の句）

⑨「取付て松にも一つふくべかな」

（蔓は棚だけでは足りず松の枝にも延びてふくべが一つぶら下がっている）

⑩「子を育つふくべを育つ如きかも」

（子を育てるのは日に日に太るこのふくべを育てるようなものだろうか。子をもたなかった子規が、ふくべが大きくなっていくのに子育てのような喜びを感じている句）

⑪「雨の日や皆倒れたる女郎花（おみなえし）」

（庭の女郎花の花もこの雨にみな倒れてしまったことだ―無残な眺めであるよ）

⑫「雨の日を夕顔の実のながめかな」

（秋の長雨で終日雨の降る中、病床に臥して夕顔の実を眺めて過ごしていることだ）

⑬「蟬なくや五尺に足らぬ庭の松」

（五尺に足らぬ小さな松にも蟬が止まって鳴いている）

⑭「糸瓜ぶらり夕顔だらり秋の風」

（糸瓜はいかにもぶらりと、夕顔の方はいかにもだらりといった感じでぶら下がっている。秋風に吹かれつつ）

⑮「病間の糸瓜の句など作りける」

（病いの苦痛のあいまにこうして糸瓜の句など作っていることだ。対象に見入っていた子規が我にかえって自分の姿を詠んだ句）

⑯「野分近く夕顔の実の太り哉」

（野分―台風―の季節も近づいている。このどっしりと太った夕顔の実はあの強い風に吹かれても平気かもしれない）

⑰「湿気多く汗ばむ日なり秋の蠅」

（雨で湿度も高く不快な病床である。その上秋の蠅までしつこくつきまとい、いかにもいとわしい日である）

⑱「鶏頭のまだいとけなき野分かな」

（まだはっきり色づいてもいない小さな鶏頭に、野分のはじめを告げる風が吹きつけている）

⑲「秋もはや塩煎餅に渋茶かな」

（残暑とは言え、塩煎餅を食べ、渋茶を飲むと秋になったことがしみじみと感じられる）

山本健吉はこれらの句について、「勝手放題」の句であると述べ、たとえば⑲を「この『秋モハヤ』の句など、何が秋モハヤなのかさっぱり分からないところが面白いと言ふべきだろうか。芭蕉の『秋もはやはらつく雨に月の形』を意識しての句に違いないが、これは時雨と月の形とに秋の末つ方の季節を捉へてゐるのだが、その句の換骨奪胎とも言ふべき『塩煎餅に渋茶かな』では何の季節感も伴わず『秋モハヤ』の述懐が大袈裟な勿体ぶったものであるだけに、肩すかしを食った滑稽感がにじみ出て来るのだ。子規独特のとぼけた句境である」（「現代俳句」）と

指摘している。

古典の豊かな教養に支えられた深い読みである。確かに煎餅を食べたり渋茶を飲んだりするのは自然現象ではないから季節感をそこに感じるのは難しいようだが、私はこれはそのまま子規の正直な実感としてみたい。子規は、わざと「とぼけ」てみせたわけでなく、病いの床で塩煎餅を食べ、渋茶を飲み、ああ、もはや秋なのだ、と深く感じていたのではなかろうか。そこに季節の推移を味わって生きている子規らしい感覚がある。この句にはユーモアがあるという指摘には私も賛同するが、それは「塩煎餅」とか「渋茶」という、少ししょっぱかったり、苦かったりするいわば日常卑近な味が「秋もはや」という風流意識と結びついているところに生まれたものではなかろうか。こんな卑近な飲み物、食べ物を平気で句の中に読むところに、いかにも外目を気にしない自在な心の動きがある。

また山本健吉は⑱の「鶏頭の」の句について次のように言う。

「この句は八月の作であるから、鶏頭がまだいとけないのと同様に、野分もまだいとけないのである。『イトケナキ』に『植物の瑞々しさ』を感ずると誓子は言ってゐる。同時に子規の心のみづみづしさを感ずることができるであろう。こういう句を見ると、子規の個性がはっきりして来たのは、彼が自己を没却することによって掴んだ境地であることがはっきり分るのだ。小主観を棄てることによって、物がはっきり見え、物の形が澄明な眼に飛び込んでくるのだ。これが子規の到達した写生の究極なのである」（同）

「いとけないし」は一種の掛け詞である。「いとけない」鶏頭の姿を子規は深い愛情をもって眺めている。そこに一陣の風が吹いてくる。その風もまだ「いとけなき」ものであり、鶏頭もそして野分もこれから秋の深まりと共に大きく、本格的になっていくだろう。「まだいとけなく」に私はそのような想像へとつながっていく心を感じる。山本はこの句を写生の精神に結びつけて解説しているが、私はこれらの句に伺われるのは、童心のたわむれ、純粋

さと言ってみたい。ここに挙げられた句はいずれも気取りも、てらいもなく、全く誰にでもわかりそうな、平凡な句である。一句だけ抜き出してみればはたしてどれ程人の評価に耐えるかわからない句が多い。ところが「仰臥漫録」の、病苦に満ちた日々の中で、これらの句を眺め子規の心を思いやってみれば、そこにまた違った感慨を覚えざるをえないだろう。これらの平凡な「勝手放題」の句ともみえるものの奥に、対象への深い関心、愛着がある。山本の言う「自己を没却」するとは、私からすれば、末期（まつご）の生の中にあって、己れを忘れて何気ないささやかな自然の営みにも好奇心を感じ、その自然と同様にたわむれる童心のユーモアだと思う。ユーモアとは「小主観」からは生まれない。自分へのこだわりを棄てて対象に見入ること、そして自分まで他人ごとのように眺める「眼の訓練」がこれらの句を生み出したと思う。子規はもともとユーモアの精神の持ち主であり、駄洒落も大好きだった。ユーモラスな明るい子規が、病苦の中にあってへこたれないで、ほのかな、かすかな一人の微笑にも似たユーモアを示しているのが、これらの句の精神ではなかろうか。

山下一海はこれらの句の中で⑦の「棚の糸瓜」を最も評価していて次のように述べている。

「（この句は）何か特別の感じがある。わざわざ前書が付けられていることもその感じを強めている。たしかにこの句には仰臥漫録の序にあたる部分の一つの決着としての意味がある。病床から眺め上げる棚にいくつか糸瓜が不規則にぶら下がっているが、それはまことに思いのままで、そこに自然の巧まざる調和と力が窺われ、病人の自分から見ると羨望を感じるほどである、の意である。旧派風の小理屈の世界を抜けていることはいうまでなく、また単純な自然観照からも抜け出ていて、一種のメタフィジックな世界にまで触手が届いているおもむきがあり、この時期の子規の句の一つの達成を認めることができる」（「俳句で読む正岡子規の生涯」）

これも一つの見方として面白い。しかし、やや真面目過ぎる見方のように思われる。私は、これらの一連の俳句

に作品としての甲乙という評価はつけられないものと思う。いずれも外部への発表とか見栄、気取りから解放された自在な心の表現で、どこか面白おかしさが漂っている。「蟬なくや」の句など全くそのままの写生句のようだが、丈低い松の木に、油蟬が止まって大きな声で突然鳴き出したなどと空想してみると、そのとりあわせが面白く感じられもする。評価は別として私が一番好きな句ということになれば⑭の「糸瓜ぶらり」の句である。ぶらり、だらりと重そうに垂れている糸瓜や夕顔と子規は遊んでいる。無心で無邪気な、無欲の遊び心、明日を思い煩わぬ心、ただ今のこと、ものに集中し、そこに思いを凝らして生きる心―そのような心が絵となり俳句となって表現されている。

次に、九月九日の記事をみてみよう。この日の記事は水彩で病床から見える庭の一部、秋海棠を描き、その中に「病床所見」と題して、次の三句を収めている。

「臥して見る秋海棠（しゅうかいどう）の木末（こずえ）かな」

（病床に臥したまま秋海棠の木末を眺めたことだ。秋海棠というさして高くない草花を「木末」として見上げるようにしてみた病床の視線は、あの藤の花の連作短歌を思わせる）

「秋海棠朝顔の花は飽き易き」

（秋海棠に比べたら朝顔の花など飽きやすいことだ）

「秋海棠に向ける病の寝床かな」

（自分の病の床は秋海棠に向きあうようにのべられ、日々それを見て過ごしていることだ）

九月十二日の記事は草花の盆栽の水彩画に「昨日床屋の持て来てくれた盆栽」と記し次の句を添えている。

「草花の鉢並べたる床屋かな」

（自分が草花の好きな病人、俳人だと知って、わざわざ盆栽の草花を届けてくれた床屋であるよ）

九月十三日の記事は水彩で画かれた朝顔の色を中央に置きそれを囲むようにして次の四句が添えられている。

「朝顔や絵の具にじんで絵を成さず」

（朝顔の水彩画を書こうとしたが、にじんで絵にならなかったことだ。確かに「仰臥漫録」の和紙に描かれた朝顔は幾分、にじんではいる。しかし柔らかみのある立派な絵で、講談社文庫はこれを表紙カバーとして使っている）

「朝顔や絵にかくうちに萎（しお）れけり」

（こうして水彩画として描いているうちに朝顔は、もはや少ししおれ始めたよ）

「朝顔のしぼまぬ秋となりにけり」

（朝顔の花は昼になるとしぼむはずだが、こうしてしぼむことなく秋を迎えたことだ）

「朝顔の一輪ざしに萎れけり」

（朝顔の花もこの一輪ざしの花びんの中でしおれていくことだ—まるで、自分の命と同じように）

「仰臥漫録」は以上のように俳句と画が一体となり、邪心のない一人の楽しみ、童心の世界にひたっている子規の姿を私達に見せている。それは私記であり、画帳でもあったからこそ、自由に、純粋に己れ一人の楽しみとして表現しえたということができよう。私はこれらの俳句や絵を出来上がった作品としてというより、病床にあってこのような試みをしている子規の心を思い描くのである。

六、食欲の問題

一般的に言って、病者にとって食事は大きな問題である。一つには、栄養をつけ体力を養うということがある。

病気によっては特定の食物が禁止されたり、あるいはまた逆に奨励されたりもする。このような体のための食事ということの他に、病者にとって食事それ自体が楽しみになるということもある。病者は多くの自由や楽しみが奪われがちであるから、食の楽しみをいわば最後に残された楽しみとして求めるようになるとも言えよう。幼い頃の私達にとって、おいしいものを食べるということが一つの夢であったように、病んで、それまでとは違った形で食欲ということが意識される場合もある。健康であわただしい日常生活を送る人が、食の快感に鈍くなったり、無関心になったりしがちなのと対照的である。

それにしても「仰臥漫録」における子規の食欲はきわめて特異なものであろう。その特異性は病苦と深く結びついていること、その中で食の快感を求め続け、それを書き続けたという点にある。もし、人が「食の文学」を編纂しようとする時、「仰臥漫録」はまちがなくその中に収められるであろう。

子規の食への関心は、何もその終末期に限ったわけではなかった。有り体に言ってしまえば、すでに書生時代から子規は食いしん坊であった。二十二才の時に書かれた「啼血始末」の中に次のように一節がある。

「出京後は誰も制限する者がありませぬから、むやみに買い食いをしてますます胃を悪くしました。毎日毎日何か菓子を食わぬと気がすまぬようになりますし、おいおい胃量も増してきまして六銭の煎餅や十個の柿や八杯の鍋焼うどんなどはつづけさまにチョロチョロとやらかしてしまいます。しかし一番うまいのは寒風肌を裂くの夜に湯屋へ行きて帰りがけに焼芋を袂と懐にみてて（＝「みたして」の意であろう）帰り、蒲団の中へねころんで、ようやく佳境に入るとか十年の宰相を領取すとかいっている程愉快なことはありません。イヤ思い出しても…」

ふざけ半分に語っているようだが、十個の柿を食べたとか、八杯の鍋焼うどんを食べたなどというのは事実に違いない。「イヤ思い出しても…」というのは、今思い出してもよだれが流れてくるということだが、このように自

らの食いしん坊ぶりを笑いの種としているというのはそのまま「仰臥漫録」にも通じるものである。

書生時代の親友であった漱石の懐旧談にも子規が大食漢で、しかもその金を平気で漱石に出させたエピソードが語られている。（「正岡子規」漱石談）その談話の冒頭は「正岡の食意地の張った話か、ハハハハ」という言葉で始まっており、「大将（＝子規のこと）は昼になると蒲焼きを取り寄せて御承知の通りぴちゃぴちゃと音をさせて食う。それも相談もなく自分で勝手に食う」というようなことが思い出として語られている。子規という人物を語る時、何よりまずその「食意地の張った」性質が特徴として取り上げられているのは興味深い。

また「読書弁」の中で、人間の欲望は、一定であって、ただ人によってその内容が違うだけだとしているが、その例としてたとえばその欲望の総量を百斤とすると、甲は「色欲六十斤、修飾欲三十斤、その他雑欲十斤」であるのに対して乙は「読書欲七十斤、食欲十五斤、その他雑欲十五斤」というような二つの典型があげられている。そして自分の場合乙だということを述べている。これは友人とのつきあいの中で発見したこと、つまり友人が関心をもっていることと、自分が関心をもっていることの違いを数字化して対照したものであろう。（数字化して表現するのは子規の文章の一つの特色で、数字によって表現できないようなことも数字によって表わしている）乙の内容が示すように、子規にとって一番関心のあるのが読書（読むことと書くこと）であり、次にくるのが食べることで、あとはその他として一括されてしまうほどのものであった。子規は多くの青年達にとって最大の、といっていい性欲の問題に煩わされなかったようである。少なくとも表面的な行動の面でみる限り性的にも淡白であって、友人達の誘惑で遊廓に行ったことはあるが、自分一人で行くなどということはなかったようである。「吉原の太鼓聞えて更くる夜に一人俳句を分類すわれは」（明治三十一年）という歌が示すように、歓楽の地、吉原は子規庵から直線距離で一キロ半という。もっともカリエスになってからの病臥生活では女遊びも無理ではあるが、そればかりでは

ない。結核は性欲を昂進させるという説もある。啄木の「ローマ字日記」などみると、むごたらしいすさんだ性生活の断片が記述されているが、子規の場合、カリエス以前においても色気話はない。プラトニックな愛もない。一体、子規は異性への愛、また性の問題をどう考えていたのであろうか。

これを知る上で参考になるのは河東碧梧桐の「子規の回想」である。その中に次の一節がある。

「性欲問題を、何か人間のすまじき恥辱のように考えていた子規はよほど異性を劣等視した封建時代の旧思想にとらわれていたようである。他の学問的処世的思想は進歩的であったにしても異性に対する思想は退歩的であったとも見える。もっとも性欲の蕉境（しょうきょう）（＝佳境）に入る余裕のなかったハンディキャップはあるが、子規がもし異性観に動揺を起こしていたら、もう少しウマ味のある、おほどかな人間味を会得したかもしれないと思う」

たしかに、母や妹に対する子規の態度には前時代の封建的な家長意識、女性を蔑視する感覚がある。（だからといって、愛情がなかったということではなく、それは多少、わがままな家長的な愛というものだったと思うし、また女性蔑視のゆえに子規のすべてを否定するのもまちがっていると思う。その時代時代の考えに誰しも支配されているのだから）

しかし異性を求めるのは体の動物的な本能でもある。この点について同じく「子規の回想」によると、子規は自分が喀血した理由として「思春期の摂生の誤り」―過度な自慰のせいと考え、「深い悔恨を脳裏に刻みつけて」いたという。もしこれが本当に子規の奥底に潜み続けたコンプレックスであるとするなら「啼血始末」のあの戯作調の一見して明るい「病い論」の影にひそむ深層の心理として見逃せないものがあろう。虚子や碧梧桐が遊郭遊びにふけった時期があるのに比べ、子規は女知らずであり、生涯童貞であった可能性も高い。子規庵でも性の問題は「汚なげな、下司な、口にすべからざる」ことのように考えられていたという。

女性関係の皆無といっていい子規はその分、滑稽で奇形的な形でその食欲の旺盛さを私達に伝えている。一説に子規の食欲はその性欲の奇形だとする見方がある。性的エネルギーを生命の根源だとする見方からすればそういう言い方もできよう。子規は「食」を求めたが、求めるということは精神化するということでもある。性が体の問題であるだけでなく心の問題でもあるのと同じように、子規にとって食は体と心の問題であった。子規は食の快感を求め続け、憧れてやまなかった。このように、根底は共通する点があるといっても性欲を表現するのと食欲を表現するのでは大分違ってくる。私は子規の文学があれほど明るく開放的であるのは啄木のような性のうしろめたさ、汚れを知らなかったからだと思う。食欲は性欲と比べたら無邪気なもので、人は（本人を含め）それを笑って受け止めることができる。「仰臥漫録」の笑いの一端は、子規のそのような食欲のおかしみに発しているのである。

具体的にこれを眺めてみよう。

「仰臥漫録」の冒頭九月二日の記事は夕顔、糸瓜などのスケッチや句に続いて、次のような詳細な食事のメニューが記されている。

「朝　粥四碗、はぜの佃煮、梅干砂糖つけ

昼　粥四碗、鰹のさしみ一人前、南瓜一皿、佃煮

夕　奈良茶飯四碗、なまり節煮て少し生にても　茄子一皿」

このような朝昼夕の三度の食事だけでなく間食や飲物も詳しく記されている。即ち先程のメモ続いて次のようにある。

「この頃食ひ過ぎて食後いつも吐きかへす

二時過牛乳一合ココア交て

煎餅菓子パンなど十個許
昼飯後梨二つ
夕飯後梨一つ」

このような調子で九月二日から十月十日までほぼ一月にわたって食べたり飲んだりしたものが、すべて記録されている。その内容をみると刺身は鰹の他にマグロやカジキなどほぼ毎日とっている（昼食）。泥鰌鍋も二日か三日に一度位、果物は梨の他にリンゴや葡萄・無花果などほとんど欠かさずとっている。あるレポートは、子規のこの食事を栄養やカロリーの点から化学分析して、子規の命を長らえしめたのはその旺盛な食欲にあると報告している。子規自らも自分の唯一の療養法は「うまいものを食ふにこれあり候」と述べているように、うまいものをおおいに食うことが自分の命を支えているという自覚もあった。しかし、それは単なる「療養法」ではなく、食の快感が生きる喜びであったこととも結びついている。

それにしても、食事の内容を記録する精神というのはどこからきたものであろうか。子規が日記にこのように食事のことを記録したのは明治二十八年の「病床日記」、明治三十年の「病床手記」につながるものである。逆に言えば子規が病床の人とならなければ、これ程食事のことなど書かなかったであろう。無意味とも思われるような食事の記録は、食事というものが病気の中で大きな位置を占める問題であることを示している。またそこには、子規の記録癖、細部の事実に対する好奇心もある。子規はデータ集めが好きだった。たとえば一ヶ月の支払いの内容を詳しく記したり、自分の収入がどのように上がっていったのかを記したりした九月三十日の記事や、虚子や瓢亭、碧梧桐など八人の家賃比べを記した九月十九日の記事など、いずれも事実そのものへの関心の表われである。また、集めた事実を整理したり、分類したり、比較したり、並べてみることも好きだった。これは子規の一つの性癖と言っ

てよいもので、初期の随筆「筆まかせ」においてもみられるものであろう。（このような事実体というべき記述の仕方は、おそらく漢文学の影響あるいは当時、もたらされた近代科学の実証精神が影響していると思われる。前者は幼年時代から親しんできた儒学や史伝の現実主義であり、後者は東京遊学によって学んだ自然科学的な物の見方、唯物的な世界観である）

毎日の食事の記録の外に、子規は食べることへの夢、憧れをしばしば記している。それは全く奇妙とも滑稽とも言いたくなるような記述である。即ち「九月二十九日」の記事の一節。

「こんなに呼吸の苦しいのが寒気のためとすればこの冬を越すことは甚だ覚束ない。それは致し方もないことだから運命として置いて、医者が期限を明言してくれれば善い。もう三ヶ月の運命だとか半年はむつかしいだらう、とか言ふてもらひたひ者ぢゃ。それがきまると病人は我儘や贅沢が言はれて大(おおい)に楽になるであらうと思ふ。死ぬる迄にもう一度本膳で御馳走が食ふて見たいなどと云ふて見たところで今では誰も取りあはないから困ってしまふ。若しこれでもう半年の命といふことにでもなったら足のだるいときには十分按摩してもらふて食ひたいときには本膳でも何でも望み通り食はせてもらふて看病人の手もふやして一挙一動悉(ことごと)く傍より扶(たす)けてもらふて西洋菓子持て来いといふとまだその言葉の反響が消えぬ内西洋菓子が山のやうに目の前に出る。かん詰持て来いといふと言下にかん詰の山が出来る。何でも彼でも言ふ程の者が畳の縁から湧いて出るといふやうにしてもらふ事が出来るかも知れない」

医師が死期を宣告してくれればよい。そうすればいつ死ぬのだからということで、その前に存分にわがままもできるし思いきった徹底した食の贅沢を尽くせるからだという。おまけにその時のことを空想して詳しく大げさに描いている。死という深刻な問題を茶化すような筆づかいで、これはマジメな論理というより、食べることへの夢、

願望を面白おかしく語ったとみるべきだろう。実際問題として子規はずいぶん贅沢な食事をとり、ごちそうの食いおさめ会などもしていたのだから、今更何をかいわんやである。こんなことを正直に書いている子規は実に子供っぽい無邪気なわがままな食いしん坊である。「仰臥漫録」という深刻な記録が時として吹き出したくなるほど滑稽で、面白く感じられるのは、そこに食いしん坊の子規の裸の姿を見る時である。

そのような例をさらに幾つかとりあげてみよう。

「自分は一つの梅干を二度にも三度にも食ふ。それでもまだ捨てるのが惜しい。梅干の核(たね)は幾度吸はぶってもなほ、酸味を帯びて居る。それをはきだめに捨ててしまふというのが如何にも惜しくてたまらぬ」(九月十九日)

たかが梅干の核にすぎない。それを惜しがってしゃぶりつくしている様を想像すればあさましく、おろかで、滑稽でもある。これは自らの食い気を戯画化し、子規自身笑って記した一文であろう。しかし、その笑いの中にも幾分の真実がある。子規にとって食べること—味わうことは、生きている喜びを実感できるささやかな手段であった。そう考えれば梅干の核一粒も生きがいである。苦痛にみちた病床にあって舌を楽しませ、その喜びを記すというのは、感覚的なものを精神的な生きがいといえるほどの愉悦にまで高めているとも見られるのである。

「松蘿玉液」において、思うように旅もできぬ子規は「臥遊旅行」を試み、空想の中でかつての旅を反芻して楽しんだことがあった。「仰臥漫録」の中で食べることこそ自分の生きがいだと主張している子規は、奥羽行脚の時、鳥海山の見える宿で酢牡蠣にありついた時のことを思い出す。

「鳥海山は窓に当たってゐる。そこで足投げ出して今日のくたびれをいたはりながら、つくづくこの家の形勢を見るに別に怪しむべきこともない。十三、四の少女と三十位の女と二人居るがきわめてきたない風つきで白粉などはちっともない。そうして客は自分一人である、などと考えていると膳が来た。驚いた。酢牡蠣がある。碗の蓋を取

るとこれも牡蠣だ。うまいうまい。非常にうまい。新しい牡蠣だ。実に思ひがけない一軒家の御馳走であった。歓迎せられない旅にもこの種の興味はある」（「九月十九日」）

かつて食べた酢牡蠣のうまさを思い起こし、今さらのように感激している。食べて味わったのは過去のことだが、これを書いている今、よだれをたらさんばかりに思い出して楽しんでいる子規の姿がここにはある。そのいやしい姿は愚かしく、また滑稽である。子規はこのように現に食べて楽しむというだけでなく、空想したり、回想したりして食の楽しみを味わうこともあった。満たされることのない食の満足感—生の喜びが空想という形に姿を変えて現れたと解釈もできよう。実際には食いすぎればその反動で腹を痛めることもしばしばだったし、食べた結果出てくる排泄は一大作業であった。その点では空想の方が害がない。もちろんそんなことを書けば人の嘲りを受けるかもしれない。しかし、これは子規一人の楽しみとして記しているものである。何の遠慮も見栄もない。自分を卑しめて笑い楽しむもう一人の自分、書き手である自分がいる。自らの奇形的とも言える食欲を記し、笑っている裏には病床の孤独と倦怠、つれづれが潜んでいる。「仰臥漫録」は何より子規自身にとっての慰めと遊びの書であったろう。

子規は食事のメニューを記録し、食への憧れを綴った文章の他に、俳句によっても食を表現した。九月九日の記述に「新暦重陽（ちょうよう）」と題して次の三句がある。（九月九日は重陽の節句—菊の節句でありこの日杯に菊を浮かべた酒を酌みかわし長寿を祝い、あるいは祈る伝統があった。）

「栗飯や糸瓜の花の黄なるあり」

（栗飯を食べ命養っている自分の目に庭の崩に糸瓜の花が一つだけ黄色く咲いているのが見えた—それはこの日の花、長寿を祈る菊の色とも見えたことだ）

「主病む糸瓜の宿や栗の飯」

（糸瓜の花咲く宿の主人である自分は今こうしてうれしく栗飯を食べ命をつないでいることだ）

「栗飯の四碗と書きし日記かな」

（「栗飯の粥四碗」と日記に記した。思えば病人ながらあきれるほどのわが食欲である。しかしまた、食えばこその命でもある）

九月十三日は枝豆の句が十句あまり並んでいる。前日食べた枝豆を素材として戯れたものである。いくつかとりあげてみよう。

「枝豆や病の床の昼永し」

（病の床で枝豆を食べながら過ごしているこの一日の昼の長く感じられることよ。）

「枝豆や三寸飛んで口に入る」

（「飛んで火に入る夏の虫」ではないが、今こうして食べている枝豆も指先で押せば三寸も飛んで口に入っていくよ、面白いことだ）

「学校に行かず枝豆売る子かな」

（わが家に枝豆を売りに来た子供がいる。どんな境遇かわからないが、学校にも行かずこうして枝豆を売って歩いているのだなあ）

「枝豆のから棄てに出る月夜かな」

（妹―あるいは母―は枝豆のからを捨てに外へ出た。折しも名月のころとて、月がこうこうと明るく照らしているよ）

「芋を喰はぬ枝豆好きの上戸かな」

（今こうして自分は枝豆を食べているが、自分の家を訪れる酒飲み達も芋は食わないが、この枝豆が大好きだという。酒飲みがいたらさぞこの枝豆を喜ぶであろう）

これらの句はただ枝豆を食べるというだけでなく、枝豆と遊び、枝豆のことから人々のことを想像して、それを句としたものである。このように枝豆と興ずる心は俳句による表現だけではもの足りず、次のような「俚歌（りか）に擬（ぎ）す」と題された創作童歌ともなって表わされた。

「枝豆　枝豆　よくはぢく枝豆　ぷいと飛んで三万里　月の兎の目にあてた　目っかち兎　よくはぢく枝豆　十三夜のお月様」

「三寸」どころか「三万里」も飛んで月の世界にいる兎の目に当ったという、戯れの空想の中に、少年のような無邪気な心が息づいている。

子規にはまたいかにも大食漢らしい句があり、人をほほえませる。即ち九月二十五日の次の二句。

「栗飯や病人ながら大食ひ」

（栗飯をこうして幾杯もおかわりして食べている。病人でありながら、旺盛なわが食い気にはあきれるほどだよ）

「かぶりつく熟柿（じゅくし）や髯を汚しけり」

（大好物の柿に食らいつき、不精髯を汚してしまった。人が見たら自分のこの食い気は何とあさましく滑稽なことであろう）

食の問題は、このような己れ一人の快心的な営み、動物的な欲望とばかりは言えない。病床の子規には全国からといってよいほど様々な贈り物が届いたし、見舞客も手みやげとしてよく食べ物を持参した。食べるということは、

その食べ物を贈ってくれた人に対する感謝にもつながっている。

たとえば九月十七日の記述には「野老氏に報ゆ」と題して石の巻の野老氏から送られた梨に対する礼状として次の二句がある。

「石巻の長十郎が見舞かな」

(名物の梨を有難う。長十郎梨というそうですがその長十郎が病床の自分を見舞ってくれました。あなたの親切に感謝します)

「吾を見舞ふ長十郎が誠かな」

(病床の自分を長十郎梨に託して見舞ってくれた、その好意うれしく感謝します)

また「大阪青々に酬ゆ」と題して、

「奈良漬けの秋を忘れぬ誠かな」

(好物の奈良漬を今年の秋もまた贈ってくれた。その親切に感謝します)

さらにまたこの日の記述に「節より送りこし栗は実の入らで悪しき栗なり」とあり、次の句がある。

「真心の虫喰ひ栗をもらひけり」

(君から贈られた栗は残念ながら虫喰い栗だったよ。しかし君の真心には感謝している)

九月二十日と思われる長塚節宛の書簡に「栗ありがたく候　真心の虫喰ひ栗もらひたり　鴨三羽ありがたく候淋しさの三羽　減りけり鴨の秋」とあるから「仰臥漫録」は書簡の草稿ともなっていた—「もらひけり」は書簡では「もらひたり」となっている—ことがわかる。「仰臥漫録」の九月九日の記事に「長塚の使栗を持ち来る。手紙にいふ。今年の栗は虫つきて出来わろし。俚諺に栗わろければその年は豊作なりと。果して然り、云々。栗の袋の

中より将棋の駒一つ出づ」とあり「栗飯や糸瓜の花の黄なるあり」以下二句の栗飯の句がある。子規を喜ばせた栗飯は節から送られて作ったものであった。

子規書簡をみれば明治三十四・五年の多くが贈られた品々―特に食べ物―に対する礼状であって、食べ物を贈り、贈られるということを通して、人々と心がつながっていた様がしのばれる。しかも、それは直接、弟子であった人々との交流にとどまらず、全国に及んでいる。

弟子達との食を通じての交流を示すものとして「兎煮て諸友を憶ふ」と題された愉快な長歌がある。

「下総の節のもとゆ送り来し柔毛兎を厨刀音かつかつと牛かひの左千夫がほふり、ふた股の太けきを煮て、桐の舎と陽光そ食す。あなうまそ。ひらの肉の炙れるを病む我取らん。残れるを秀真もかもな。家遠み呼ぶすべをなみ、もみち葉の赤木もあはれ幸なし」(下総の国に住む長塚節から贈られた毛の柔らかい兎を、台所の包丁でかつかつと、牛飼いの左千夫が切り、二股の太い肉を煮て桐の舎と陽光とで食べる。ああうまひ。ひら肉のあぶったものを病気の自分から食べよう。残ったものを秀真が食べるよ。家が遠くて呼ぶこともできない赤木も岡も気の毒に、運の悪いことだ)

長塚節から贈られた兎の肉をめぐって、弟子たちと無邪気に戯れ遊んでいる天真爛漫で無邪気な、明るい子規の茶目っ気がここには伺われる。このような弟子達との交流の他に、母や妹と子規をつなぐものとしても食は重要な問題だった。

十月二十七日の記事には、明日が子規の誕生日(旧暦の九月十七日―この日、子規は三十四才になる)というので、母と妹に対する「平生の看護の労に報いん」と料理屋から「会席膳二五品」を注文したことが記されている。その二十五品を記した後で、「料理屋の料理は、千篇一律でうまくないものはないと世間の人は言っているが、病

床にあって、さしみばかり食べている自分にとってはそれが「珍しくもありうまくもある」と感想を述べ「平生台所の隅で香の物ばかり食ふて居る母や妹には更に珍しくもあり、更にうまくもあるのだ」と記す。「珍しいこと」「うまいこと」は食の善し悪しを決める規準でもあったが、子規は病人である自分が食事の贅沢を尽くしている傍らで、母や妹は「香の物」を食べていることを知っていた。そこには封建的な女性蔑視があり、病者のわがままもある。この日のように共に贅沢な食事をとるということは、ハレの日の営みであって、苦労をかけている二人にごちそうしてやる、というのはいかにも家長的な意識に立つ発言ではあるが親子三人水入らずで同じ贅沢をすることによって、食事も一層おいしいものと感じられる。二人ともこの日の食事を楽しんだのであろうし、何よりも子規自身にとっても深い満足と喜びでもあった。

子規はこのハレの日の食事のことから昨年の、碧梧桐・四方太・虚子・鼠骨ら四人を招いた誕生日のことを思い出した。この日は「御馳走の食ひおさめ」をやるつもりでいろいろ趣向もこらした。案内状を出す時、土産の注文として虚子には「赤」という題を与えたところ、虚子は卵を真っ赤に染めたのを持ってきた。鼠骨は「青」という題にしたところ、青蜜柑を持ってきた…食後話もはずみ「不安心不愉快を忘れる程」であった。思い出の最後に「実に愉快でたまらなんだ」と子規は記している。食の快楽といっても、それは孤独な己れ一人の欲望ではなく、人との温かい交わり、共に食べ共に談笑する共同体を背景とするもの、人々とつながるものである。「仰臥漫録」の中に一人の苦しみ、一人の快楽だけでなく病者を核として形成された温かい共同体の存在が感ぜられてくるのである。

七、遺書

「仰臥漫録二」―二冊目の「仰臥漫録」はそれまでの日記的、またメモ的な記述が幾分変化を見せている。それを示すのが「候」という言葉である。即ち十月十三日の「古白曰来」の四文字で結ばれた一冊目の記述を受けて、二冊目の冒頭は「再びしゃくりあげて泣き候処へ四方太参りほととぎすの話、金の話などいろいろ不平をもらし候ところ夜に入りては、心地はればれと致申候」と記述が続く。「候」は「です、ます」にあたる丁寧表現であり、一般に読み手を意識した時に用いられるものである。そして、ここまでの叙述の中で一度も用いられなかったものである。それが、自殺への誘惑にかられた叙述の後、十月十五日までこのスタイルが続き、同じ十五日の途中から元に戻って記録的な漢字片仮名交じりの文章となっている。

なぜこの部分だけ平仮名が用いられ、「候」が用いられたか。それは前述したように、自殺への思い―「自殺熱」の興奮から覚めて、あらたな落ちついた気持ちで書き始めたということばかりでなく、孤独な一人の楽しみとしての表現から読み手―直接には虚子や碧梧桐ら、死後「仰臥漫録」を見る門人達である―を意識し始めたことの表われだと思われる。しかもそれは、自分を死の側においての語りかけである。「自殺熱」にかられた日の出来事を記した子規は、まざまざと死の近きを意識した。それは、これ迄の、自らの楽しみ、生きがいとして喜びやら苦しみを記録してきた方向を転換させるものであった。「再びしゃくり上て…」という記述、その翌日の「十月十四日誰も参り不申」「十月十五日一昨夜寝られさりし故昨夜はよひのほどより眠り申候。起きては眠りとうとう夜明け候へば直に便通あり。心地くるしく松山伯父へ向け手紙一通したため申候」と続くのは内容的にはこれ迄同様の日記

的記述ではある。ところがこれに続く文章は明らかに遺書であり、日記ではない。子規は何も遺書を書くつもりで「仰臥漫録」を書き始めたのではなかった。苦しみの反動として求め続けた快楽や楽しみの記録として書き始めたこの日記が、つのる病苦に自殺を思い、しかもその自殺さえ書くことによって乗り越えて生きてきたものの、子規は病苦を通してすぐそこまで来ている死についてまざまざと思いをはせざるをえなかった。それがこの日記に遺書のまぎれ込んだ理由であろう。

遺書を書いてもなお子規は生きていた。(当然のことながら遺書を書いたからといって人はすぐ死ぬわけでない。賢治もひとたび死を覚悟して遺書を書いたが、その後二年の生を与えられた)記述は再び日記に戻るものの、この遺書こそ子規の精神をもっともよく伝えるものであり、この日記の中で最も感銘深い部分となっている。そこで、この十月十五日の遺書について考えてみよう。

この日の記述は「松山伯父へ向け手紙一通したため申候」という文で始まるが、その手紙は次のようなものである。

「謹啓　先日は御手紙下され有難く候。御祖母様(＝祖父、大原観山の妻、重)御げんきに御くらしなされ候由、めでたく存じ奉り候。御伯母様(＝この手紙の宛先、伯父、大原恒徳の妻、常子)とかく御すぐれなされぬ由、痛心の事にござ候。私こと、もはやこの世に望みも何もござなく、ただつらき思ひばかり致し申し候。人は生きてさへ居れば善きように申し候へども(＝生きていさえすればよいと言うが)生きて居る程苦しきことはござなく候。毎日御馳走たべたいたべたいとのみ愚にもつかぬことのみ、申し居り候へども、今は御馳走も食へ申すまじく候(＝御馳走も食べられなくなりました)。昨夜夢の中にて御目にかかり候ところ、しみじみ御話も承らず目さめ申し候。けさ寝起の苦しさに取りあへず一書したため申し候。無礼の段、御許し下されたく候。謹言　常規」

子規は夢の中で、松山にいる伯父と会った。しかし十分に話を聞くことができなかったので、この手紙を書いたという。ここには、謙虚な叙述の中にも病苦の辛さを率直に語る子規の心に死への憧れが潜んでいることが察せられる。この中で伯父から手紙があったことが記されているが十月二日の記述に自らの出生に関する伯父の手紙の一節が書き写されている。それは、大原観山が初孫であった子規の誕生を旅先で聞き喜んで次のような手紙を書いたというものである。

「正岡にも去年十七日安産男子出生之由、別して（＝特に）うれしき事に候…八重（＝子規の母）儀、あともけんきに候（＝出産後も元気）と相見え、日あきに参り候よし、大仕合にござ候。小児も丈夫に候へども少しちち付候よし。とふぞとふぞ（＝どうか）早くなおり候よう、祈り候ことに候…子は沢山これありても孫はまたまた別のものと見え早く見たく存ずることに候…」

病床にあって死の近いことを意識している子規が自らの出生に関する手紙を読んでどう感じたか。なぜ、この一節を「仰臥漫録」に書き写したのか。おそらく死の意識はその生の始まりを改めて意識させ、これ迄の生き方、自らの生全体を一つの完結したものとして自覚させたことがその背景にあると思う。

こうして「松山伯父へ手紙一通したため申候」という記述のあと、日記的叙述をはみ出した遺書が続くことになる。これを（A）～（D）の四つに分かって考察してみよう。

（A）天下の人余り気長く優長（ゆうちょう）に（＝のんびりと）構へ居り候はば後悔致すべく候（＝後悔するでしょう）
天下の人あまり気短く取（とり）いそぎ候はば大事出来申すまじく候（＝大きなことができませんでしょう）
吾等（＝私）も余り取いそぎ候ため病気にもなり不具にもなり思ふことの百分の一も出来申さず候（＝できま

せんでした）

しかし吾等の目よりは（＝私からみると）大方の人はあまりに気長くと相見え申し候。

「天下の人」とは直接にはこの遺書を読む門人であるが、死にゆく子規が生きているすべての人に向けて呼びかけたとも考えられる。死に赴こうとしている子規は、アフォリズム風にユーモアさえこめて語り始める。「のんびり構えていると後悔しますよ。又せっかちに急ぎすぐても、大きな仕事はできませんよ」と。「優長」であるか「気短く取いそぐ」かは、この人生に対する構えとして根本的な態度の違いである。それは子規に言わせれば単なる「のんびり型」と「せっかち型」というより、大志をもつかどうかにかかっている。「優長」な人とは大志をもたないで、平凡な日常生活に甘んじて生きる人である。「気短く取いそぐ」人は大志ゆえにひたむきに努力する人である。子規はその大志をしばしば「野心」と表現した。子規自らその「野心」ゆえに精進に精進を重ねた。読むことと書くことに打ち込んだ。その結果病いに犯されたが、病いがまたその情熱に一層の拍車をかけた。「野心」ゆえに「取いそぎ」—特に日清戦争従軍などという無謀な試みもした。その結果「病気」にはなったが、文学の面から言えば、子規はこれによって文学者として自分を大成することもできた。「思ふことの百分の一も出来申さず」といっても、子規に一切の後悔はなかったと思う。謙虚な語り口の中にも、むしろ自信と誇り、充足感すらある。そこから、「大方の人はあまりに気長くと見え候」という批判も生まれてくる。確かにこの遺書を読むと私達は与えられたこの生をあまりにも「気長く」無為徒食のだらしのない現状満足のうちに安閑とすごしてはいまいか。考えさせられるし、子規の人生を生き急ぎの人生だったと批判する前に私達の生の内実がこれでいいのか反省させられる。こうして死に赴こうとしている子規は、これを読む読者におそらくは永遠にわたって、明治の精神ともいうべき「野心」

というものの健全な力強さと、限られた命を燃焼しつくし病床においても努力精進を怠らなかったその精神的エネルギーというものについて考えさせるに違いない。それにしても大仰に「天下の人」に向かってこんな遺書―「遺訓」―を書いた人はどこにもいないだろう。ここには死にゆくものの悲しみどころか、大いなる達観と、そこから生まれるユーモアさえにじんでいる。

明治三十五年八月十八日以降、子規はここにあるような「天下の人」に宛てた遺書ではなく、親しい門人に幾通かの忠告の書簡を出している。「大方の人はあまりにも気長く」見えるというのが、多くの人に対する忠告であるのに対し、これは、それぞれの個性に応じた忠告である。以下それを紹介してみよう。

明治三十五年八月十八日、森田義郎（明治十四年生まれ、子規門の歌人）に宛てた次の書簡。

「君ノ評判甚ダヨクナイ、今ノウチニ酒ヲ止メ玉ヘ。晩酌ト云フモノハ隠居シタ爺サンノスルコトナリ。今カラ晩酌ナドトハ生意気ト云フベキモノカ」

後日、森田義郎は子規のことを回想した文章の中で、この手紙のことに触れ次のように書いている。

「十九日―今日―一周忌（＝子規の一周忌、即ち明治三十六年九月十九日）、僕は深き感慨が胸一杯になって何も言ふことが出来ぬ。丁度一月前の八月の十九日先生は厳しく僕に禁酒を勧められた。一年たった今日僕はどうであらう。飲みたい放題は飲まぬけれども禁酒して居るとは決して言へないのである。それで御墓の前で頭があがらう譯（わけ）がない。僕、何故酒が止められぬであらう。師はこれのみを何故許してくれなかったらうとは、けだし負け惜しみから出てくる本音であらう」

晩酌をいさめる子規の忠告には青年のような若々しさと気迫がある。義郎にとって子規の言葉は一生、忘れがたく厳しくも温い言葉であったのである。

同じ三十五年、八月十九日に香取秀治郎（明治七年生まれの鑄金家であり、また子規門の歌人。東京美術学校を卒業し、昭和二十八年に文化勲章を受けているが、子規のレリーフも作っている）に宛てた書簡。

「君ハ何カイフト誰ガ告ゲ口シタロウナドトイフガソンナ下ラヌコトハイフモノデナイ。君ノヤッタコトハ大小トナク、盡ク僕ノ耳ニハイッテヰルヨ。君モモウイイカゲンニ辛抱シ玉ヘ。アマリタワケタ真似ヲシテハ困ルヨ。僕ガ病気シテ毎日苦シンデ居ルトコロヲ思フタラ、君等モ少シ位ノ辛抱シタマヘ。君独リノ不幸ト思フベカラズ。辛抱ハ後ノタメナリ。女郎買ハ月ニ一度位ハ善イガソレハ五六十銭デモ足ルヨ」（香取秀治郎宛　同八月十九日）

この書簡も大胆、率直、歯に絹着せぬ単刀直入な言い方で胸に迫るものがある。死の一月前とは思われぬ気迫のこもった文章であり、病人らしい弱さや嘆きなど一切ない。あくまで後輩を思えばこその真実率直な言葉である。

同日、長塚節にも書簡を記した。節は明治十二年の茨城県生まれの歌人であり、小説家、明治三十三年、二十二才の時、子規を訪問して根岸短歌会の一員となった。子規の信頼があつかったが、同時に子規を深く敬愛し、病床の子規を慰めるべく、栗、菓子、野兎、やまべ、大和芋など様々なものを贈っている。

「只今君ニモロタ大和芋（一般ニツグ芋ト云フ。ツグ芋山水ナドイフ事ヲ君ハ知ラヌカ）ヲ食ヒナガラツクヅク考ヘタ。此芋ガ君ノ村デ今始メテ植エタトイフ程ナラ君ノ村ハ実ニ開ケテ居ラヌ野蛮村ニ違ヒナイ。恐ラクハ小学校モナイデアラウ。若シ尋常校ガアルナラ高等校ハナイデアラウ。兎ニ角子供ハ学校ニモ行カナイデ鼻垂レテヰルノガ多イデアラウ。従ツテ農芸ナドハ少シモ進歩シテヰナイデアラウ。思フニ君ノ村デハ君ノ家一ケンダケ比較的開ケテヰテ他ハ盡ク野蛮ナノニ違ヒナイ。ソコデ僕ノ考ヘルニハ君ニハ大責任ガアル。ソレハ君ハ自ラ率先シテ君ノ村ヲ開カネバナラヌ。学校モ立テルガ善イ。村民ノ子弟ノ少シ俊秀トモイフベキ者アラバ君ハ学費ヲ出シテ（若クハ村費ヲ出シテ）東京ヘデモ水戸ヘドモ出シ簡易農学校位ノ修行サセテヤルガ善イ。其他農談会トカ幻燈会トカ

ヲ開イテ村民ニ智識ヲ与ヘネバナラヌ。委細ハ面会ノ節話スベシ。
一家ノ私事ダケデモ忙シイトイフヤウナ能無シデハ役ニ立タヌ。其傍デ一村ノ経営位ニハ任ジナクテハ行カヌ。君ハ東京ヘ出テ来ルコトヲ道楽カ何カノヤウニ思フテ居ルカ知ラヌガソレハ大間違ヒダ。時々東京ヘ来テ益ヲ得テ帰ルヤウニ務メナクテハナラヌ。田舎ニ引込ンデシマツテソレデ忙シイナドト云ッテルヤウデハ困ル。
僕ナドヘ物ヲ贈ラルルニハ珍シイモノヲ要セヌ。水戸ノ名菓ナドヨリハ君ガ手ツクリノ大根カ蕪ノ方ガ善イ。今度ノヤマト芋ノ如キハ甚ダアリガタク感ズル」

この書簡は長塚節の生き方を決定づけたといってよいほど重要な書簡となった。前の二つの書簡もそうであるが、ここでも子規は文学上の忠告ということはいっさいなく、その生き方に対して、その個性を見て助言している。節への忠告は、贈られた大和芋のことから、節の暮らしている村を想像し、その中で知識ある者、智恵や財力ある者がどうすべきかということを諭している。また、前の書簡が忠告として「～するなかれ」と禁じているのに対して、この書簡は「～する」義務がある、「～すべきだ」という形で積極的な奨励となっている。節に対する子規の期待の大きさを語るものであろう。後述するように、子規は今ひとたびの生が与えられたなら小学校の先生になろうか、植林の事業に携わろうかと考えているが、子をもたなかった子規が、その生き方として、（文学上の後継者という以上に）最も期待をかけたいわば、わが生を受け継いで生きる者として託したのがこの長塚節であったと思われる。

このような遺訓を読むと、たとえ死に赴こうとする者であっても逆に、生ける者を励まし、鼓舞することもできるし、未来に向かって行きゆく人々に語ることによって、その人々の心の中に生きることもできるということがまざまざと感じられてくる。子規も若かった（三十四才）が、義郎二十才、秀治郎二十七才、節二十二才である。

（B）貧乏村の小学校の先生とならんか。日本中のはげ山に樹を植えんかと存じ候。会計当而己矣　牛羊茁壮長而己矣（＝会計当るのみ、牛羊さっとして、壮長するのみ）この心持にて居らば成らぬと申事はあるまじく候。われらも死に近き候今日に至りやうやう悟りかけ申候やう覚え候。痩我慢の気なしに門番関守夜廻りにても相つとめ可申候と存じ候。ただ時々の御慈悲には主人の残肴（＝食べ残し）きたなきはかまはず肉多くうまそうな処をたまはりたく候。食気ばかりはどこまでも増長可致候（＝つのっております）。

小学校の先生になろうか、植林の仕事でもしようか、と思っておりますとは言っても、もちろん、子規に再び健康な日があろうなどという希望があるわけでない。従ってこれは、今一度自分の人生をやり直せるなら、という意識で書かれたものであろう。人は誰しも一回限りの人生を生きるしかない。人生も終わろうとしている今、かえりみれば野心に駆られて生き急ぎ、病いによって文学に生きることになった人生であった。しかし、もし健康な今一度の生を与えられたならいかに生きたであろうか。生の終末を意識して自分の生涯が完結したものとしてあらたに見えてくるばかりでなく、このように別の生き方を空想する心理は興味深い。来世を希望しないものは、現世での別な生をあたかも希望のように空想するのかもしれない。

子規は言う。孔子はかって会計やら牛羊の世話などという卑しい仕事にもたずさわったが、どんな仕事にあっても誠意をもち責任をもってことにあたった。（この一節は「孟子」にある）いたずらに高い地位・名声を求めず、己が分に安んじその仕事に誠意をもってあたるなら、どんな仕事でもなしとげられないことはないだろう。これは遺訓として人を励ます言葉であると同時に、自らの生涯をふり返るしみじみとした述懐でもある。すでに述べたよ

うに子規は「小学校の先生」どころでない「野心」に燃え、名声を求め続けた人間であった。

「仰臥漫録」の十月十九日の記述に次のようにある。

「十六、七歳の頃余の希望は太政大臣となるにありき。上京後始めて哲学といふことを聞き哲学ほど高尚なる者は他になしと思ひ哲学者たらんことを思へり。後また文学の末技に非る（＝文学がつまらないものでないということ）を知るや生来好めることとて文学に志すに至れり。しかもこの間、理論上大臣を軽視するにかかはらず感情上何となく大臣を無上の栄職の如く考へたり。しかるに昨年以来この感情全くやみ、大臣たるも村長たるも其処に安んじ公のために尽すにおいて一毫の（＝少しも）軽重なきを悟りたり

今日余もし健康ならば何事を為しつつあるべきかは疑問なり。文学を以て目的となすとも飯食ふ道は必ずしもこれと関係なし。もし文学上より米代（＝生活費）を稼ぎ出すこと能はずとせば今頃は何を為しつつあるべきか。

幼稚園の先生もやって見たしと思へど財産少しなくては余には出来ず。造林の事なども面白かるべきもその方の学問せざりし故今更山林の技師として雇はるるの資格なし。自ら山を持つて造林せば更に妙なれど買山の銭なきを奈何」

これは子規の一生の夢の変遷とも言える。松山中学校にいたころ自由民権運動の影響を受け、十六、七才のころは一国の宰相たらんとした。上京し大学予備門、文科大学で学んでいるうちに哲学者に憧れ、次に文学者へと子規の野心は変化してきた。文学が好きであり、文学に大きな意義があると考えながらも、子規は気持ちの上では大臣が最も名誉ある仕事だという考えが棄てきれずにいた。しかし、昨年ごろから—明治三十三年である—このような気持ちは全くなくなったという。野心に捉われ、野心に駆り立てられるようにして生きてきた子規は、このあたりに大きな価値観の転換があった。世俗的な価値観、明治の社会において支配的であった立身出世を尊しとする価値

観から、子規は自由になり始めたということを、この文章は示して美しい。文学に志したのは病いゆえであった。もし健康であったら何をしていたか—子規は自問する。文学は好きでもあり、目的とはしていたが、収入の道としては別なことをしていたかもしれない。病いゆえに文学を収入の道とするに至ったが、健康であったら何をしていたろう、そこから子規は別な生き方をしていた自分を空想する。幼稚園の先生（経営者）か、あるいは植林か…しかし、それぞれ難がある。無邪気な、たわいもない空想を子規は書きながらも楽しんでいるかのようである。

子規は言う。孔子が会計や家畜の世話というような卑しい仕事でも、誠意をもって取り組んだように、自分も「門番」でも「関守」でも「夜廻り」でもいい。どんな仕事であっても己が分に安んじ、自分のもち場において誠意をつくすあるのみだと。このように子規は死を前にして名声や野心から自由になり謙虚な人間になった。しかし、子規はそれをいかにも悟りくさい教訓めいた形では表現しなかった。自分を茶化すように、ただ食べ残しでいいから肉のたっぷりついたところを下さい、食気は募るばかりですと言う。これは生前自ら記した墓碑銘の末尾に「月給四十円」と記した心にも通うものであり、子規の無邪気な、捉われない自由な心を感ずることができる。深刻ぶったこと、固苦しいマジメさを嫌う心は見栄や偽善を嫌う心と一つである。見栄も偽善も—子規の言葉で言えば「色気と野心」—を棄てた子規の精神は、私には達人の悟達（ごだつ）にも近いと感ぜられる。

このような一種のおかしみさえたたえた自由な心は次の（C）（D）に至って一層のびやかに表現されている。

（C）兆民居士（じ）（＝「居士」とは学徳の高い隠者を言う漢語表現。仏教では出家しないで家にいて仏門に帰依する男子、又男子の死後、その法名の下につける称号。明治時代、社会的に信頼されていた学徳ある人物は時に「居士」をもって遇された。）の「一年有半（ゆうはん）」（＝明治三十四年九月三日刊行）といふ書物世に出候よし新聞

の評にて材料も大方分り申候　居士は咽喉に穴一ツあき候由（＝明治三十四年五月二十六日、咽頭ガンの切開手術を受けたことを指す）。吾等は腹背中臀ともいはず蜂の巣の如く穴あき申候。（＝明治三十年九月、脊椎カリエスの膿のため臀部に二カ所の穴があいたのを初めとし同三十五年には腹部にも穴があく）。「一年有半」の期限（＝兆民は余命一年有半と宣告された）も大概は似より候ことと存候。乍併居士はまだ美といふ事少しも分らずそれだけ吾等に劣り可申候。理（＝理屈、事の理）が分ればあきらめつき可申、美が分れば楽み出来可申候。杏を買ふて来て細君と共に食ふは楽みに相違なけれとも、どこかに一点の理がひそみ居候。焼くが如き昼の暑さ去りて夕顔の花の白きに夕風そよぐ処、何の理窟か候べき。

子規の兆民に対する批判、二人の病いや死に対する意識の違いについては項を改めて論ずることとして、この文章の主眼は兆民批判をきっかけとして自らの病気哲学を述べた点にある。重い病気であればあるほど、みじめな卑屈な意識をもつ傾向が強い中にあって、子規はその病気の重さ、ひどさを逆に反動のように誇りとし、「蜂の巣の如く穴」あいているとユーモラスに誇張し、自分の方が兆民より病いが重いと言っている。その言い方は実に明快率直で美が分からない分だけ「吾等に劣り申す可く候」と人間としての優劣さえつけている。この誇り、この自負はどこからくるのか。子規一流の諧謔もそこにはあろう。しかしそればかりではなく、ここには病気と戦って生き抜いてきた者でなければ言えぬ男らしい自信があると思われる。子規のような大病人からすれば兆民は病気の新参者にすぎない。その新参者がいかにもわけ知り顔のように何か書き、しかもそれが世間でもてはやされる。病苦や死がそこではいかにも軽薄に取り扱われている—深刻ぶったり、悲しんだりするのも軽薄な扱い方だ。死は感傷で

はない。死になじんできた子規からすれば死がセンセーショナルにと扱われるから、ベストセラーになったりする（兆民の「一年有半」は当時、ベストセラーになった）と考えたのではなかろうか。「病床六尺」の中でも「居子をして、二、三年も病気の境涯にあらしめたならば今少しは楽しみの境涯にはひる事が出来たかも知らぬ。病気の境涯に処しては、病気を楽しむといふことにならなければ生きて居ても何の面白味もない」という。病気の苦しみを味わいつくした子規は、貪婪なまでに楽しみを求める人でもあった。生きがいというものをこれ程、具体的に明確な形で求めた人は少ないであろう。私達は一般に生きがいなどと考えることも少なく、流されるままに何となく生きていることが多い。しかし、過酷な試練を生きる子規にとって積極的、意識的に生きがいを求めねばその苦しい人生に何の意味もなかった。子規にとっての生きがいとは美を求め、美を味わうことにあった。そこに楽しみ、快楽が生まれる。その楽しみ、快楽があればこそ実感としての生きるかいもある。そして、どんなに苦しい、末期的と思われるような状況の中にあっても、一片の美はあり、楽しむ工夫はある。兆民が余命いくばくもないと知って、妻と杏を食べた。その味わい、楽しみもなるほど自分の主張する楽しみに近い。しかしそこにはまだまだ徹底しない口先だけの理屈がある。生悟りだ。子規はそう感じたのだろう。末尾の一文は苦しみのどん底にあって、発見した美しさに我を忘れて恍惚としている子規の姿をあざやかなまでに示している。耐えがたいような病苦の時がすぎた一時、夕顔の花の美しさにうっとりと見惚れる。そこには無心な心の愉悦がある。その愉悦は病苦の与えてくれた恵みとも言えよう。

子規にとって美は病苦を救済するものであった。「美」などといえばずいぶん観念的な響きのある言葉だが、食べること、それは舌の快感であり、食の美である。庭の草花、それは目の楽しみであり、創作としての俳句や短歌あるいは絵画、書画を生み出す。美は本能的・生理的な快感に結びついていると同時に、芸術作品としての、精神

の愉悦にも結びつき、単に感覚を楽しませるだけでなく心を楽しませるものとなった。

付け加えておけば、この時点で子規は「一年有半」を直接読んではいなかったようで、この批判は新聞等を見てのものと思われる。おそらく兆民批判を口に出したことがきっかけであろう。十月十七日、高浜虚子が「一年有半」を子規に送ってきた。読んでも批判は変わらなかった。十月二十五日の記述に『一年有半』は浅薄なことを書き並べたり、死に瀕したる人の著なればとて新聞にてほめちぎりしため忽ち際物（＝一時時な流行をあてこんで作られた作品）として流行し六版七版に及ぶ…」とさらに手厳しい批判を展開している。それをみると、内容に対する批判というより「死に瀕した人」の書として扱われベストセラーになったことに対する批判で「生命を売物にしたるは卑し」とその一文と結んでいる。

（D）吾等なくなり候とも葬式の広告など無用に候。家も町も狭き故、二三十人もつめかけ候はば柩の動きもとれまじく候。何派の葬式をなすとも柩の前にて弔辞伝記の類読み上げ候事無用に候。戒名といふもの用ゐ候事無用に候。かつて古人の年表など作り候時、狭き紙面にいろいろ書き並べ候にあたり、戒名といふもの長たらしくて書込に困り申候。戒名などは無くもがな（＝ない方がよい）と存候。自然石の石碑やいやな事に候。柩の前にて通夜すること無用に候。通夜するとも、代りあひて可致候。柩の前にて空涙（＝うそ涙）は無用に候。談笑平生の如くあるべく候。

これは自分の葬式や墓に関する遺書である。まず初めに子規は死亡広告など無用だという。その理由として、誰にも知られずひそかに死にたいとか、多忙な時に来てもらって迷惑をかけるから、などというのでない。弔問客が

多くなると、家も狭いし、路地も狭いから柩の動きもとれなくなるからというのである。実に即物的な物の考え方で、本気でそんなことを考えていたのかと思う人もいよう。確かに冗談であり、ユーモアである。ここには自分の死さえ人ごとのように外から眺めて、楽しく書く心のゆとりがある。子規は多くの人がつめかけて柩の動きがとれなくなっている様を想像して一人笑っている。それは「死後」という文章と同じ発想によるものである。「死後」という文章の中で子規は死を客観的に人ごとのように見て、自分の死後のことをいろいろ空想し楽しんでいる。なるほど、自分がなくなると考えれば、これほど耐えがたい、悲しくつらいことはないわけだが、亡くなった後の自分の「身体」がどうなるか空想してみれば、一時の悲しみはともあれ、一面では「愉快」な空想というものかもしれない。自分が死んでも、その体がどうなるのか見ている自分がいたり、葬式でにぎわっている様を見ている自分がいる。

徹底した無神論、無宗教の唯物論者であった中江兆民はその信念に従って葬儀は無宗で行った。子規は特定の宗教を信じなかったものの、宗教に親しみ、味わいを感ずるようになっていた。「何派の葬式をなすとも」というのは、宗教を離れた葬式が考えにくいというばかりでなく、おぼろげな形で宗教的な感情に親しみつつあったことの表われでもあろう。弔辞伝記の類を不要としたのは、偽善や虚偽をにくむ正直な心—というより、むしろもはやこの世の名誉など棄ててしまった清潔な心からくるものであろう。柩の前で流す涙が「空涙」だというのは言いすぎであろう。しかし、生きることより死を願っていた子規からすれば、そして死というのは全く当り前のことにすぎないという前提に立てば、涙はいかにも安っぽいものかもしれない。死に直面し、もはや死を乗り越えてあの世から、死んだ自分を取り囲み、嘆き悲しみ、大騒ぎしている様子を空想してみれば、「談笑平生の如くあるべし」とゆとりをもってさとしたくもなろう。こんな遺書を書いた子規はもはやこの世の人でなく、あの世に立つ人であった。

この遺書は死に慣れ親しみ、それこそ幾度も考え続け、時にそれをバネとして生きた子規でなければ書けぬものであろう。死を忘れたり、死をいたずらに恐れがちな私達にとって、反覆熟読すべき悟達の境地にも近い遺書といってよい。

付記しておけば、子規はここで自分の墓碑銘を記していないが、それはすでに書いたもので充分だと考えたからであろう。即ち、明治三十一年七月三十一日、友人の河東銓に宛てて次のような書簡を出し、別紙として墓碑銘も添えていた。「シャンパント扇アリガトー。シャンパンハアノ日、柳原ガ来テ飲マシタノニエオ飲ミイデナ。アシャ自分ガ死ンデモ石碑ナドハイラン主義デ、石碑立テテモ字ナンカ彫ラン主義デ、字ハ彫ッテモ長タラシイコトナド書クノハ大嫌ヒデ、寧ロコンナ石コロ（＝石を図に書いて示している）ヲコロガシテ置キタイノヂャケレド万一ヤムヲ得ンコッデ字ヲ彫ルナラ別紙ノ如キ者デ盡シトルト思フテ書イテ見タ。コレヨリ上一字増シテモ余計ヂャ。但シコレハ人ニ見セラレン。

（別紙）正岡子規　又ノ名ハ処之助又ノ名ハ升又ノ名ハ子規又ノ名ハ獺祭書屋主人又ノ名ハ竹ノ里人。伊予松山ニ生レ東京根岸ニ住ス。父隼太松山藩御馬廻加番タリ。卒ス。母大原氏ニ養ハル。日本新聞社員タリ　明治三十□年□月□日没ス　享年三十□　月給四十円」

別紙の一文はこのままの形で―日付を入れないで―東京田端の大龍寺にある子規の墓碑銘として刻まれている。死んでしまったのだから日付が入るのが当然であるが、子規がこのような意識のもとに生きたことを示すものとしてそのまま刻まれたのは適切な配慮だったと思う。

参考文献

「仰臥漫録」複製版（大正七年）
「柿二つ」高浜虚子
「子規の回想」河東碧梧桐
「子規全集」講談社
「現代俳句」山本健吉
「俳句で読む正岡子規の生涯」山下一海